



発掘区全景（北から）



発掘区全景（西から）



井戸 S E05（南から）

## 15 平城京左京六条一坊九・十坪の調査 第415次

- 1 事業名 (仮称)新池薬師寺線道路新設工事
- 2 通知者名 奈良市長 大川靖則
- 3 調査次數 平城京第415次調査
- 4 調査地 奈良市柏木町475-2他
- 5 調査期間 平成10年11月5日~12月18日
- 6 調査面積 282m<sup>2</sup>
- 7 調査担当者 三好美穂・原田香織

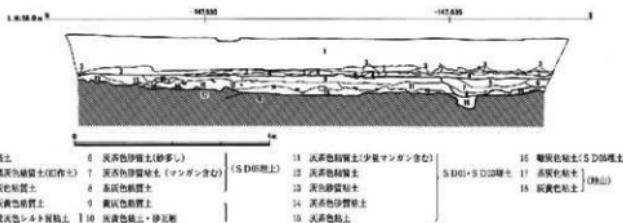


発掘区位置図 (1/6,000)

### 8 調査概要

調査地は、平城京の条坊復原によると、北端は五条大路南側溝から、南端は六条条間路北側溝までの細長い範囲で、左京六条一坊九・十六坪坪境小路、九・十坪坪境小路、十坪東辺に相当する。ここに6ヶ所の発掘区を設定し、主に条坊関連遺構の確認を目的として調査を行った。なお、東隣接地では、昭和62年度と本年度に発掘調査が実施されており、十・十五坪坪境小路と同両側溝（市第139次調査）、五条大路と同南側溝、十五・十六坪坪境小路と同両側溝（市第405次調査）を検出している。

**第1発掘区** 五条大路南側溝と九・十六坪坪境小路東側溝の交差点に当たる。調査面積は36m<sup>2</sup>。層序は盛土、黒灰色粘質土（作上）、灰色粘質土、灰黄色粘質土と続き、現地表下約0.8mで造構面（標高56.85m）に達する。S D01は五条大路南側溝、S F02・S D03は九・十六坪坪境小路、同東側溝である。発掘区全体に南側溝と東側溝のあふれと考えられる埋土が堆積し、検出面上ではS D01とS D03の明確な輪郭は見られなかったが、溝底でわずかながらその痕跡が認められた。S D01の西端の標高は56.55m、S D03の南部の標高は56.42mで、五条大路南側溝 S D01より九・十六坪坪境小路東側溝 S D03の方がやや低くなっている。埋土からの主な出土遺物は軒丸瓦6225種別不明1点、奈良時代のものと思われる土器・須恵器である。S D04・S D05はS F01路面上にある溝である。重複関係からS D01・S D03よりも古い。S D04は東端はS D03に削平され、西端は発掘区外へ続く。検出面での幅約0.2m、発掘区西端での深さ0.08m、溝底の標高は56.53

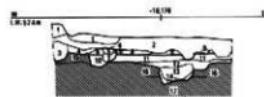


第1発掘区東壁土層図 (1/100)

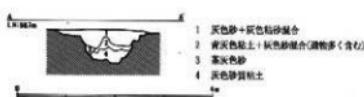
~56.58mで西の方へ傾斜する。埋土は灰茶色粘土である。奈良時代のものと思われる須恵器が出土した。SD05は平面L字形で上面を後述のSD06に削平されるが、検出面での幅0.6~1.6m、深さ0.3~0.37m、溝底の標高は発掘区東端55.15m、南端55.13mではほぼ水平である。SD05の埋土から土師器と須恵器が出土したが、小片のため時期は不明である。SD06は発掘区南部を北西から南東へ流れる流路で、南肩は発掘区外である。SD01・SF02・SD03よりも新しい。遺構面からの深さは0.4mで、埋土から平安時代前半の土師器、須恵器が出土した。

**第2発掘区 九・十六坪坪境小路を南北に4等分したうちの南1/4付近に当たる。**調査面積は7m<sup>2</sup>。層序は黒灰色粘質土（作土）、暗灰色砂あるいは黄褐色粘砂と続き、現地表下約0.4mで灰色砂の地山（標高56.7m）に至る。遺構は地山上面で検出した。九・十六坪坪境小路東側溝SD03の東肩は発掘区外に、西肩は後世の溝に壊されており全幅は不明である。検出分の幅は2.7mである。北半分は一段深くなっている、検出面からの深さは約0.4m、溝底の標高は北端56.06m、南端56.4mである。深い部分での溝心の国土座標はX=-147,713.000、Y=-18,175.684である。埋土から小片のため詳細な時期は不明だが、奈良時代の土師器、須恵器が出土した。

**第3発掘区・第4発掘区** 一つの発掘区を埋設管を避けて2つに分けたもので、九・十坪坪境小路と九・十六坪坪境小路の交差点から十坪東辺北部に当たる。調査面積は60m<sup>2</sup>と141m<sup>2</sup>。層序は、黒灰色粘質土（作土）、灰白色土以下、第3発掘区と第4発掘区の北部では、灰茶色砂質土あるいは灰茶色粘砂と続き、第4発掘区中南部では、暗灰色粘土、暗灰色砂質土と続き、いずれも現地表下0.3~0.4mで茶灰色砂の地山（標高56.4~56.6m）に至る。遺構はすべて地山上面で検出した。SD07は九・十六坪坪境小路西側溝である。幅約1.8m、深さ0.6~0.7m、溝底の標高は北端55.87m、南端55.76mで南へ傾斜する。主な出土遺物は、詳細な時期は不明だが奈良時代の土師器、須恵器である。両肩には護岸のためのものと思われる多くの杭跡がある。SF08・SD09・SD10は九・十坪坪境小路および同北側溝、同南側溝である。SF08の路面幅は約5.1m、両側溝心間距離は約6.3mである。推定道路心の国土座標値は概ねX=-147,746.620、Y=-18,185.000である。SD09は幅約1m、深さ約0.4m、溝底は標高約56.1mではほぼ水平である。埋土から軒丸瓦6313Dが1点、小片の



第2発掘区北壁土層図(1/100)

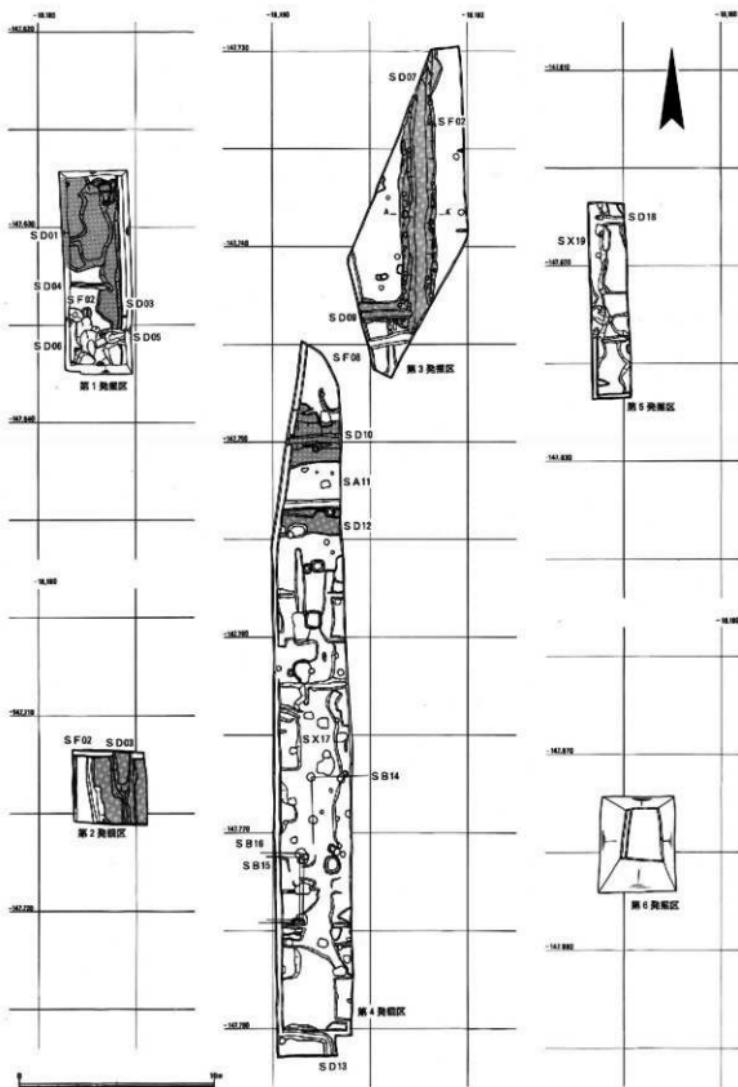


第3発掘区溝SD07土層断面図(1/100)

検出した。SD07は九・十六坪坪境小路西側溝である。幅約1.8m、深さ0.6~0.7m、溝底の標高は北端55.87m、南端55.76mで南へ傾斜する。主な出土遺物は、詳細な時期は不明だが奈良時代の土師器、須恵器である。両肩には護岸のためのものと思われる多くの杭跡がある。SF08・SD09・SD10は九・十坪坪境小路および同北側溝、同南側溝である。SF08の路面幅は約5.1m、両側溝心間距離は約6.3mである。推定道路心の国土座標値は概ねX=-147,746.620、Y=-18,185.000である。SD09は幅約1m、深さ約0.4m、溝底は標高約56.1mではほぼ水平である。埋土から軒丸瓦6313Dが1点、小片の



第3・4発掘区西壁土層図(1/100)



造構平面図 (1/250)

ため時期は不明だが須恵器が出土した。深い部分での溝心の國土座標値は $X = -147,743.470$ 、 $Y = -18,185.000$ である。SD10は幅約2m、深さ約0.7m、溝底の標高は西端55.86m、東端55.84mで、東側の交差点に向けてやや傾斜する。埋土から軒丸瓦6225種別不明1点、詳細な時期は不

明だが奈良時代の土師器、須恵器が出土した。深い部分での溝心の国土座標値はX = -147,749.940、Y = -18,188.000である。S A11・S D12は十坪の北を限る築地塀とその雨落溝である。S D12は幅1.3~1.4m、深さ0.07~0.1m、溝底は標高約56.4mではほぼ水平である。S D13は第4発掘区南拡張区にあるL字形の素掘りの溝で、幅0.5~0.8m、深さ約0.25m、溝底は標高約56.1mではほぼ水平である。埋土は暗灰色砂で、小片のため時期は不明だが土師器、須恵器が出土した。S B14は東西1間以上(1.5m)、南北1間以上(2.1m)の掘立柱建物である。重複関係からS X17より古い。S B15は東西1間以上、南北2間(3.2m)の掘立柱建物である。S B16より古く、S X17より新しい。S B16は東西1間以上、南北2間(3.6m)の掘立柱建物である。S B15・S X17より新しい。他の柱穴を含めてほとんどの柱穴がとても浅く、あまり残存状況は良くなかった。S X17は浅い溝状造構である。西端は4カ所に発掘区外へ続く溝状の造構が接続するような部分が見られるが、今回の調査では明らかにすることはできなかった。また、S X17は推定十・十五坪坪境小路西側溝から概ね5mにあり、位置関係から築地塀の雨落溝の可能性も考えられる。埋土は上層が黒灰色土、下層が灰色砂である。重複関係からS D12・S D13・S B14より新しく、S B15・S B16より古い。埋土から詳細な時期は不明だが奈良時代の土師器、須恵器が出土した。これらの中にはローリングを受けたものが多く含まれている。

第5発掘区 十坪の東辺中央部南寄りに位置する。調査面積は19m<sup>2</sup>。層序は黒灰色粘質土(作土)、黄灰色砂質土、発掘区東半から南部にかけて堆積する灰色粘砂と続き、現地表下約0.4mで黄灰色粘土の地山(標高56.2m)に至る。造構検出は地山上面で行った。S D18は、ほぼ坪の南北1/2付近に位置し、幅0.4m、深さ約0.1mの東西溝である。溝底は標高約56.1mではほぼ水平である。東端は発掘区外へ続き、西端はS X19に直角に合流する。十・十五坪坪境小路西側溝とS X19とをつなぐ排水溝の可能性がある。埋土から奈良時代の須恵器が出土した。S X19は、東肩と南端を検出し、発掘区外北と西に続く。位置関係からみてS X17と続く溝状造構の可能性がある。底は平坦ではなく凸凹し、一部深く掘り下げられたところもある。深さは0.18~0.36mである。埋土から軒丸瓦6308 I 1点、奈良時代の土師器、須恵器が出土した。完掘後、S D18との合流点付近で小穴を4つ検出した。遺物はなかった。

第6発掘区 十坪の南東角に当たる。調査面積は、地上面では19m<sup>2</sup>だが、盛土が約1.2mと厚かったため造構検出面では5m<sup>2</sup>となる。層序は、盛土、黒灰色粘土(旧作土)、暗青灰色粘土(旧作土)、茶灰色粘砂と続き、現地表下約1.9mで暗茶灰色粘土の地山(標高55.7m~55.8m)に至る。造構検出は、まず茶灰色粘砂層上面(標高約55.95m)で行った。発掘区東端で南北溝を1条検出した。埋土は青灰色粘砂で、遺物は瓦や土器の細片が出土した。次に茶灰色粘砂層を掘り下げ、地山上面で造構検出を行った。明確な造構はなかったものの、地山上面は北から南へ傾斜しており、茶灰色粘砂層にはかなりローリングしたとみられる奈良時代の瓦片や土器片が少量含まれていることから、この層が六条条間路北側溝と十・十五坪坪境小路西側溝との交差点付近のあふれの埋土である可能性がある。

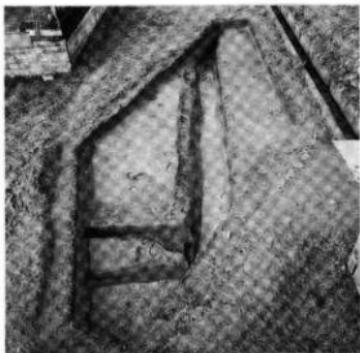
今回の調査では、九・十六坪坪境小路と東西両側溝、九・十坪坪境小路と南北両側溝の位置を確認する事ができた。また、九・十六坪坪境小路と九・十坪坪境小路の交差部分において、西側溝S D07が北側溝S D09との合流点をやや南に過ぎた所で、東へ向きを変えているようであるが、それ以上は事業地外なので確認できず、交差部分の詳細な構造は不明のままである。その他、調査地において造構の残存状況は全般に良好であったものの、どの発掘区も範囲が狭く、結果的に不明なままの点も多い。今後、周辺でさらに調査を進めて行く必要性があるだろう。(原田香織)



第1発掘区全景（南から）



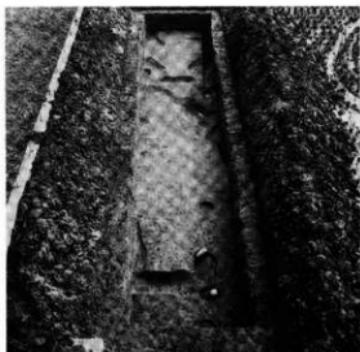
第2発掘区全景（南から）



第3発掘区全景（南から）



第4発掘区全景（北から）



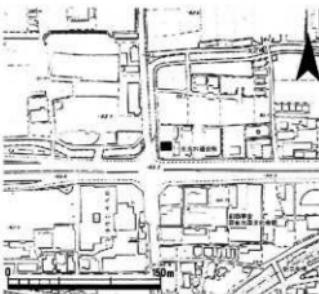
第5発掘区全景（北から）



第6発掘区全景（北から）

## 16 平城京左京二条三坊三坪の調査 第416次

1 事業名	事務所ビル建設
2 通知者名	吉田機電株式会社
3 調査次數	平城京第416次調査
4 調査地	奈良市法華寺町213-1、1916
5 調査期間	平成10年11月16日～11月27日
6 調査面積	12.8m <sup>2</sup>
7 調査担当者	久保清子



発掘区位置図 (1/6,000)

### 8 調査概要

調査地は、平城京左京二条三坊三坪の西南隅部分にあたり、東二坊大路の東側に隣接している。今回、東西10.1m、南北12.6m、計127m<sup>2</sup>の発掘区を設定したが、現地表下から地山上面まで深さが約3.2mに達するため、最終的な面積は12.6m<sup>2</sup>になった。

発掘区内の層相は、調査前の駐車場造成時の盛土 (1.6～1.7m)、黒灰色土 (旧作土0.2m) 灰褐色砂質土 (旧床土0.1m)、黄灰色砂質土 (旧床土0.1m)、灰色系の粘土4層 (0.9m)、中世の遺物を含む暗灰色粘土 (0.15m) と続き、現地表下約3.2mで青黄灰色粘土の地山に達する。地山の標高は概ね60.3mである。

検出遺構には、溝 S D01、S D02がある。S D01はS D02の埋土上面で検出した東西方向に流れる溝で、幅0.27m、深さ0.1mである。重複関係からS D02よりも新しい。S D02は南北幅4.0m以上、深さ0.9m以上である。北岸部分のみ検出した。埋土上層からは、9世紀前半から中頃にかけての土師器、須恵器、黒色土器、他に土馬1点が出土した。なお、調査地の東側、三坪南辺中央の調査で確認されている三・四坪坪境小路北側溝よりも北側に位置する。また、湧水が著しいことや現在、調査地の西隣には蘆川が流れていることから推察すると、S D02は東西方向に流れる河道であった可能性が高い。

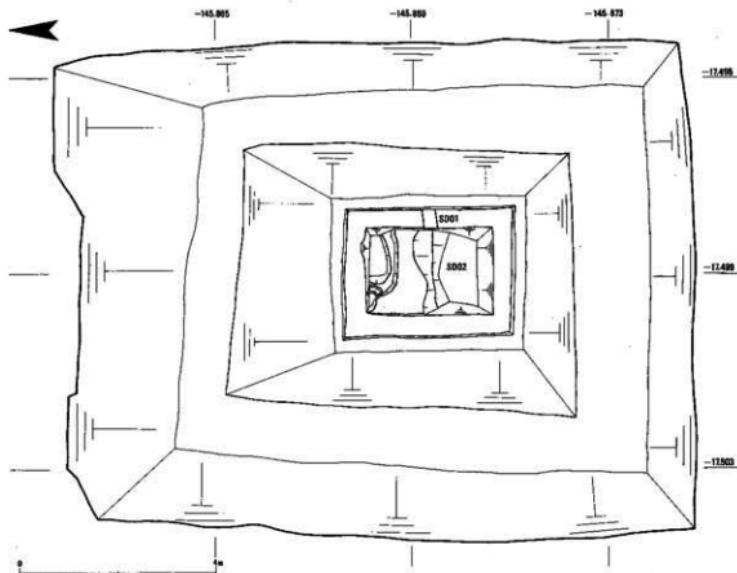
これまでに、今回の調査地の西側に近接した地点、左京二条二坊十四坪の調査で、奈良時代の遺構面よりも50cm下にある砂混じり黄褐色粘土層の下部及び青黄褐色粘土層上面から多量の旧石器が出土し、石器製作跡が見つかっていることから、発掘区の一部で下層遺構の確認調査を行なった。しかし、地山の青黄灰色粘土の下には暗灰色砂及び灰色粗砂が堆積しているのみで、遺構及び遺物はなかった。(久保清子)

1) 奈良國立文化財研究所「左京二条三坊三坪の調査 第156～188次」『昭和59年度平城宮跡発掘調査概報』1985

2) 奈良國立文化財研究所「左京二条二坊十四坪の調査 第189次」『昭和62年度平城宮跡発掘調査概報』1988

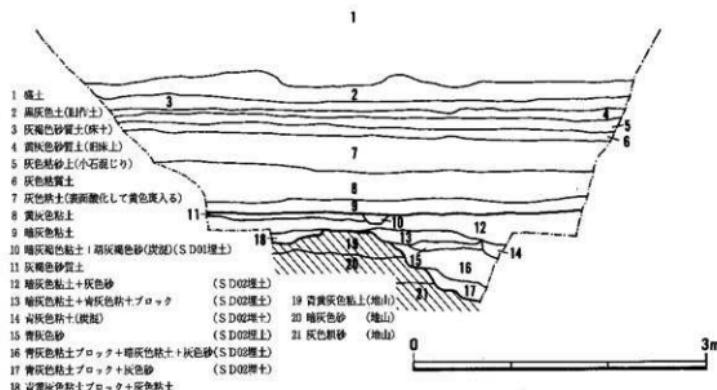


発掘区全景 (北から)



造構平面図 (1 / 100)

N -145.869 L.H: 53.0m S



東壁土層図 (1 / 50)

## 17 平城京左京八条二坊四坪の調査 第417次

- 1 事業名 第11号（杏南）市営住宅（D  
事業地）建替事業
- 2 通知者名 奈良市長 大川靖則
- 3 調査次数 平城京第417次調査
- 4 調査地 奈良市杏町81-7
- 5 調査期間 平成11年1月27日～2月12日
- 6 調査面積 72m<sup>2</sup>
- 7 調査担当者 安井宣也



発掘区位置図 (1/6,000)

### 8 調査概要

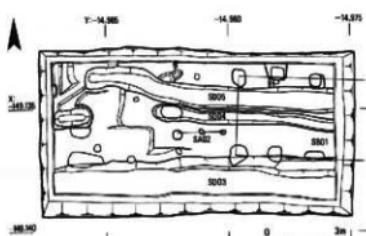
調査地は能登川・岩井川扇状地の末端に位置し、平城京の条坊復原では左京八条二坊四坪中央部のやや北寄りにあたる。昭和56年度に調査地のすぐ南側で実施した市第14次調査では、奈良時代の平城京の宅地に関連する遺構と平安時代末～鎌倉時代の集落に関連する遺構が、平成6年度に調査地のすぐ西側で市営住宅建設に伴い実施した市第305次調査では、奈良時代の平城京の宅地に関連する遺構と平安時代末～鎌倉時代の旧河道がそれぞれ確認されている。

**層相** 旧住宅に伴う盛土（厚さ0.5m）の下に水田作土（厚さ0.1m）、作土の下層土である灰色や褐色の砂質シルト層（厚さ0.4m）があり、黃灰色砂質シルトを主とした扇状地堆積層となる。遺構検出面は扇状地堆積層の最上面（標高52.1m）である。

**検出遺構** 奈良時代の掘立柱建物1棟（SB01）、掘立柱塀1条（SA02）と平安時代末～鎌倉時代の溝3条（SD03～05）である。SB01は桁行2間（3.0m）以上、梁間推定2間（3.0m）の南北棟掘立柱建物。南側柱は後述する溝SD03の掘削で破壊されている。SA02は東西2間（4.5m）の掘立柱塀。SD03は幅1.8m、深さ0.6mの東西方向の溝。埋土は褐色砂質シルトで、12世紀後半～末の土器類と瓦類が出土した。SD04は幅0.5m、深さ0.3mの東西南向の溝。埋土は褐色砂質シルトで、土器類の細片を含む。重複関係から後述する溝SD05よ



発掘区全量（東から）

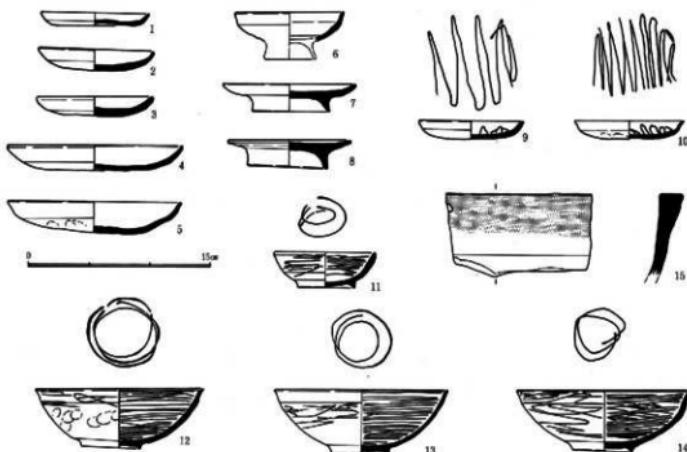


遺構平面図 (1/200)

り古い。S D05は幅1.0m、深さ0.3mの東西方向の溝。埋土は褐色灰色砂質シルトで、12世紀前半の土器類が出土した。特に平安時代末～鎌倉時代の溝3条（S D03～05）は市第14次調査で確認した遺構群と一連のもので、集落内あるいは外部を区画する溝と考えられる。（安井宣也）

**出土遺物** 総量は遺物整理箱18箱分で、奈良時代から近世までの時期のものがみられるが、大半は平安時代末～鎌倉時代の溝S D03・05から出土した土器類と瓦塊類である。そのうち、溝S D03から出土した土器類と瓦塊類について報告する。

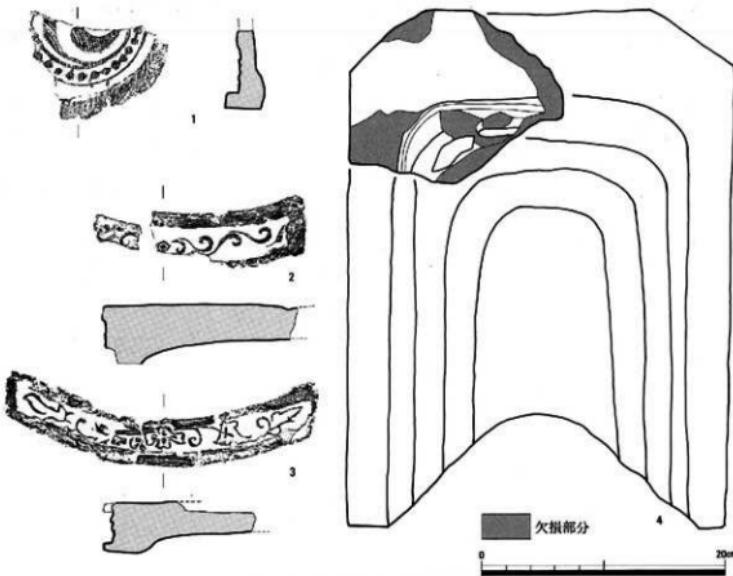
溝S D03から出土した土器には、土師器皿・高台付皿・高台付椀・釜、瓦器皿・椀・小椀・盤がある。土師器皿（1～5）は、口径により大小の2種類がある。小皿（1～3）は、口径8.9～9.8cmのもので、その器形・胎土の特徴によりさらに3種類程度に分かれる。1は、色調が赤みを帯びた白色で器厚が約3mm程度と口縁部をやや直立気味に立ち上げる。2は、胎土の色調は1に類するが、器厚が約4mm程度である。口縁部を内湾気味に立ち上げ、端部を強く指なすことでより面取りをする。このため、端部の断面形状はやや台形を呈する。3は、胎土の色調が褐色であり、胎土に砂粒を多く含むものが多い。器厚が4mmを超えるものもみられる。口縁部を内湾気味に立ち上げ、端部を丸く収める。大皿（4・5）は、口径が14.5～15cm程度のものである。4は口縁端部を内側に丸めて、丸い端面を形作っている。土師器高台付皿（7・8）は、胎土と皿部分の形状及び調整により2種類に分けることができる。7は、やや褐色味を帯びた色調で、やや砂粒を多く含む。皿部分の口縁部は短く立ち上がる。これに対して8は、胎土が乳白色であり、皿部分の立ち上がりがほとんどなく、平板状である。また、皿部分の見込みを板状の工具を用いて平滑にした後に、なでていることが窺える。土師器高台付き椀（6）は、1点のみの出土。胎土は白色で細かく、調整も丁寧である。瓦器皿（9・10）は口径8.8～9.5cmで、ともに内面見込みにジグザグ状の暗文を施すものである。瓦器小皿（11）は、1点のみの出土である。口径8.4cmで、内面見込みに螺旋状の暗文を施すものである。口縁端部と、高台疊付け部分が他の部位に比べて強く摩耗している。瓦器椀（12～14）は、口径13.8～14.5cm、器高5.0～5.5cm程度のもの。



溝S D03出土土器（1/4）

いずれも、内面見込みの暗文を螺旋状の圈線で施す。外面のヘラミガキはかなり省略が進み、ヘラミガキの分割が認められなくなるものもある。瓦器盤（15）は小部位の出土であり、口径、器高は不明。端部を平坦に仕上げるが、内外面ともにほとんどヘラミガキが施されない。内外面の上部位に漆が付着する。いずれの土器類も12世紀後半～末の特徴を示す。

瓦塊類は整理箱で10箱分ある。軒丸瓦5点、軒平瓦5点、熨斗瓦3点、鬼瓦1点、塙1点がある。軒丸瓦の内訳は6291A1点、平安時代以降4点である。軒平瓦の内訳は平安時代以降5点である。以下、平安時代以降の軒瓦と鬼瓦について記す。1は右巻きの巴紋軒丸瓦で、1点出土。珠紋と内外圈線をもつ。紋様面には木目痕が明瞭に残る。瓦当側面下半部はヨコ方向のナデを施す。2は5回反転均整唐草紋軒平瓦で、3点出土。顎貼り付け式の段顎である。凸面はタテ方向のヘラケズリを施す。凹型成形台の圧痕がある。凹面は糸切り痕と布目痕を残す。瓦当付近をヨコ方向のヘラケズリを施す。3は3回反転均整唐草紋軒平瓦で、2点出土。顎貼り付け式の段顎である。凸面は顎の段に沿ってヨコ方向のナデを施す。もう1点はタテ方向のヘラケズリを施す。凹型成形台の圧痕がある。凹面は糸切り痕と布目痕を残す。瓦当付近をヨコ方向のヘラケズリを施す。4は鬼瓦。二重の弧線がある。隅部分は角を落としている。上記の特徴を有するものに藤原宮から出土している三重弧紋鬼瓦がある。<sup>33)</sup>周縁の広さの違いから左上隅の部分になると思われる。藤原宮跡出土の鬼瓦は7世紀後半から8世紀初めに比定されている。（立石堅志・山前智敬）



溝S D03出土軒瓦および鬼瓦（1／4）

- 1) 奈良市教育委員会「平城京左京八条二坊二・四坪発掘調査報告」「奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和56年度」（1982）
- 2) 奈良市教育委員会「平城京左京八条二坊四坪の調査 第305次」「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成6年度」（1995）
- 3) 奈良国立文化財研究所「藤原宮第24次(東面大廈)の調査」「飛鳥・藤原宮調査報告9」（1979）
- 奈良国立文化財研究所「藤原宮第27次(東面北門)の調査」「飛鳥・藤原宮調査報告10」（1980）

## 18 平城京左京八条一坊十五坪の調査 第418次

- 1 事業名 第11号（杏中）市営住宅（B事業地）建替事業  
2 通知者名 奈良市長 大川靖則  
3 調査次數 平城京第418次調査  
4 調査地 奈良市杏町319-1  
5 調査期間 平成11年1月28日～2月27日  
6 調査面積 98m<sup>2</sup>  
7 調査担当者 大庭淳司



### 8 調査概要

調査地は、平城京の条坊復原では左京八条一坊十五坪中央やや北寄りに相当する。調査は十五坪内の様相確認を主目的として行なった。発掘区は北・南の2箇所に設定した。両発掘区の層相は、盛土以下、作土が0.5~0.6m続き、標高約52.7mで奈良時代土器を包含する褐色砂質シルトに達する。褐色砂質シルト層は奈良時代整地土と考えられる。これより下層は浅黄色シルト（北発掘区ではグライ化が進み、青白色を呈する）、青灰色中砂、浅黄色粘土、灰色粘土、橙黄色粘土と地山が続く。遺構検出は褐色砂質シルト層及び浅黄色シルト層上面で行った。

検出遺構には、奈良時代のものに掘立柱塀S A01・02・03、土坑SK02・03・04・05、奈良時代末～平安時代初頭のものに土坑SK01、平安時代末のものに溝SD01がある。以上、すべて褐色砂質シルト層上面で検出した。

S A01は東西4間（7.2m）以上の掘立柱塀。柱間は1.8m等間。S A02は東西3間（6.3m）の掘立柱塀。柱間は2.1m等間。S A03は南北1間（2.1m）以上の掘立柱塀。柱間は2.1m。いずれも奈良時代の土師器・須恵器が出土している。

SK01は、直径約0.6m、深さ約0.2m。8世紀末から9世紀初頭の土師器碗Aが出土した。SK02は、直径約0.6m、深さ約0.3m。軒丸瓦6314Aが1点出土した。SK03は、直径約1.5m、深さ約0.1m。SK04は、直径約1.4m、深さ約0.5m。SK05は、直径約1m、深さ約0.25m。SK02・03・04・05からは奈良時代の土師器・須恵器が出土している。

SD01は幅約1mの溝で、深さは発掘区南端で0.45m、発掘区北端で0.1mある。埋土は上下2層に分れる。上層から多量の河原石とともに奈良時代の平瓦・丸瓦、12世紀前半から半ばの瓦器・土師器、また常滑窯系陶器の甕が出土した。

なお、浅黄色シルト層上面で検出した遺構に南発掘区のSX01がある。ただし遺構の大部分が発掘区外にあり、全体形は不明。埋土は3層に分かれる。いずれも水成堆積ではなく、水が溜まるような状況にはなかったと考えられる。出土遺物はないが、奈良時代整地土との重複関係から、奈良時代以前のものといえる。

周辺に弥生・古墳時代遺跡が広がることから、下層遺構の確認のため、南発掘区を標高約51.5mまで掘り下げたが、遺構はなかった。標高52.4m付近から下は、堅固な粘土層が続き、上層の地山とやや様相が異なる。



北発掘区全景（南から）



南発掘区全景（北から）

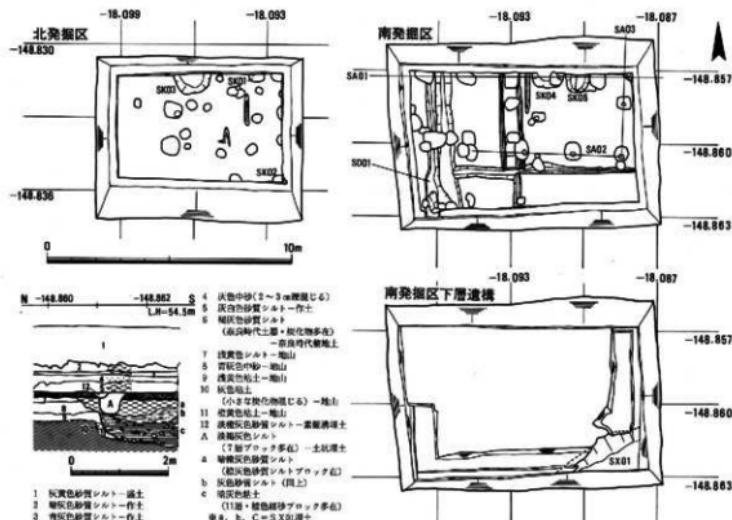
北発掘区では、青白色シルト層上面で、有機物を含んだ暗灰色粘土層を検出した。本層は発掘区西半分を占め、西に向かって深くなる。このことから奈良時代以前に湿地帯が発掘区以西に広がっていたと考えられる。市第13・175・216・265次調査では、左京八条一坊十六坪、八条二坊一坪・二坪内において湿地帯が確認されている。時期関係は不明だが、周辺地域が奈良時代以前から水田化される前の時期まで、湿润な環境にあったといえる。本調査で検出した奈良時代の整地はこうした環境への対応として行なわれた可能性がある。

出土遺物には土器類と瓦類があり、土器類が遺物整理箱で2箱分、瓦類が2箱分ある。土器類には奈良時代の須恵器・土師器、8世紀末から9世紀初頭の土師器碗A、12世紀前半から半ばの瓦器・土師器、また常滑窯系陶器の壺があるが、細片ばかりである。瓦類は大半が丸・平瓦であるが、SK03から出土した軒丸瓦6314Aが1点ある。

(大庭淳司)

1) 奈良市教育委員会「平城京左京八条二坊一坪の調査 第98次」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和60年度』1986

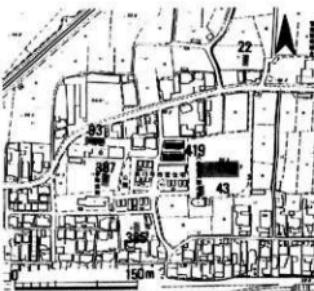
2)・3) 奈良市教育委員会「平城京左京八条二坊二坪・杏道跡の調査 第337次・第340次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成7年度』1996



北・南発掘区構造平面図(1/200)・南発掘区下層構造平面図(1/200)・南発掘区東壁土層断面図(1/100)

## 19 平城京東二坊坊間路の調査 第419次

- 1 事業名 第13号（八条）市営住宅（C事業地）建替事業
- 2 通知者名 奈良市長 大川靖則
- 3 調査次數 平城京第419次調査
- 4 調査地 奈良市八条一丁目812番地の7
- 5 調査期間 平成11年2月12日～3月5日
- 6 調査面積 294m<sup>2</sup>
- 7 調査担当者 安井宣也



発掘区位置図 (1/6,000)

### 8 調査概要

調査地は能登川・岩井川扇状地の末端で、平城京の条坊復原では左京七条二坊六・十一坪間の南北方向の道路である東二坊坊間路にあたる。市営住宅建設前は水田で、その畔は条坊の遺存地割として認識できるものではなかった。

調査地のすぐ西側で実施した市第93次調査<sup>1)</sup>・市第387次調査では、水田面下1.7～1.9m（標高53.5m）付近で奈良時代の宅地に関連する遺構（掘立柱建物・塀、溝、井戸、土坑）が確認されているが、東側で実施した市第43次調査と南側で実施した市第385次調査では、同じ標高で旧流路や後背湿地が推察される状況であった。

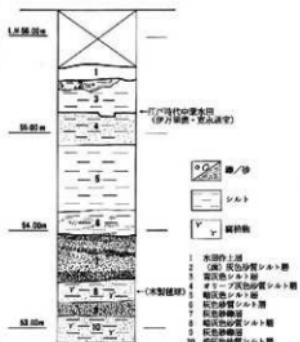
今回の調査は、東二坊坊間路の確認及び奈良時代から現在までの地形と土地利用の変遷の把握を目的として北2棟の建設予定地に第1～3発掘区を設定した。

#### 層相

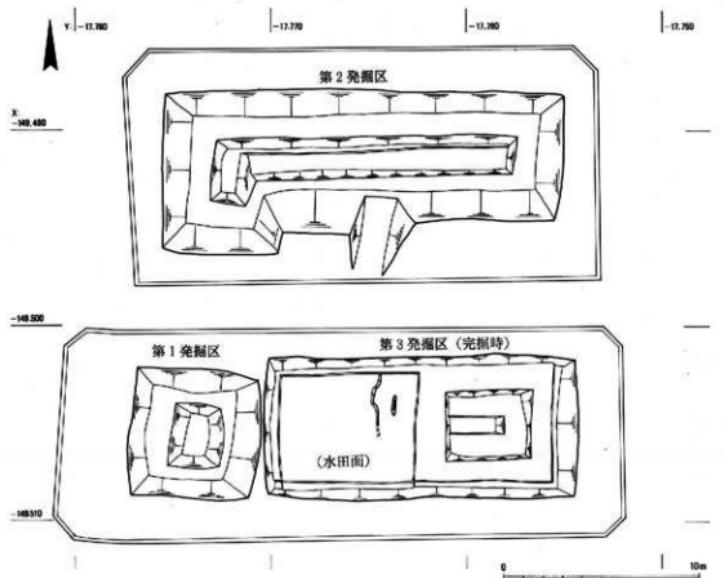
各発掘区とも上から盛土、作土層の下に灰色系のシルト層が4層続き、灰色疊層（湧水著しい）と暗灰色砂質シルト層との互層となる。概して流路や後背湿地の特徴を示す。オリーブ灰色砂質シルト層上面（標高55.2m）では江戸時代中葉の水田面が認められる。



第3発掘区東端部南壁土層断面（北から）



上層柱状図 (1/50)



発掘区平面図 (1/250)



第1発掘区全景 (東から)



第2発掘区全景 (西から)



第2発掘区北壁土層断面 (南西から)



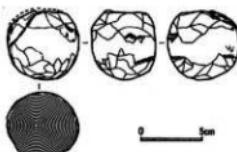
第3発掘区江戸時代水田面 (南西から)

### 検出遺構

まず調査地内の層相と奈良時代遺構面の確認を目的として第1発掘区を設定したところ、周辺の遺構面とはほぼ対応する標高53.9mで灰色砂礫層を確認し、発掘区全体が旧流路にあたる可能性が考えられた。そこで、この灰色砂礫層の広がりと東二坊坊間路の確認を主目的として第2発掘区を設定したところ、標高53.7mで灰色砂礫層を確認したが、上面で遺構は認められなかった。一部では標高53.0mまで掘り下げたが、灰色砂礫層からの湧水が著しく土層の観察のみにとどめた。また、第3発掘区を設定してオリーブ灰色砂質シルト層上面の江戸時代中葉の水田面の検出を行ない、東から西に0.1m程度低くなる地割に関連する段差と溝1条を確認した。なお、東端部では標高52.9mまで掘り下げたが、状況は第2発掘区と同様であった。  
(安井宣也)

### 出土遺物

第3発掘区で確認した江戸時代中葉の水田面から出土した伊万里焼片・瓦片・銅錢(寛永通宝)が各1点ずつ、第2・3発掘区の灰色砂礫層から出土した時期不明の須恵器・土師器細片及び暗灰色砂質シルト層から出土した木製品4点がある。木製品4点のうち用途がわかるのは毬球の球1点、箸1点で、その他は棒状や板状の加工品である。毬球の球は芯持ちの材の上下を荒く加工し、縦に細長い球形に仕上げている。(久保邦江)



出土木製品(1/4)

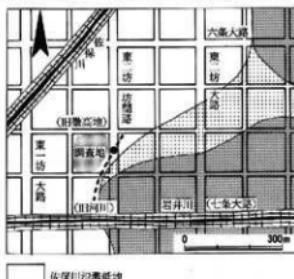
### まとめ

調査の結果、調査地内で土地条件が安定し本格的に水田化したのは江戸時代中葉以降でそれ以前は後背湿地や流路であり、過去の地形環境が東隣接地の市第43次調査地や南隣接地の市第385次調査地とはほぼ同様であることがわかった。ただし時期を特定できる遺物が出土しなかったため、変遷の詳細については明らかにし得なかった。

奈良時代の東二坊坊間路については関連する遺構が確認できなかったが、調査地が扇状地の微高地の北西線に位置していることや西近接地の市第93・387調査地で奈良時代の住宅に伴う遺構が確認されていることも考慮すれば、当時の地形が佐保川か能登川・岩井川に伴うものかは特定できないが微高地を南北に流れる河川の氾濫低地であったことが推察され、調査地付近では東二坊坊間路は施工されていなかった可能性がある。

なお、層相が標高53.9m付近で砂礫とシルトの互層からシルト層へと大きく変化するが、このことは河川の流系に大きな変化があったことを反映するとみなされ、佐保川や岩井川の流路の固定やこの地域の開発の在り方とも関連していると考えられる。

最後に、調査地一帯は河川と開発との関連という地理的な観点でみて重要な地域であり、今後この地域の発掘調査では旧流路や河川の状態を反映する上層の詳細な観察も必要であると思われる。  
(安井宣也)



現地形と条坊復原(1/15,000)

- 1) 奈良市教育委員会「平城京左京七条二坊六坪(第93次)の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和60年度』(1986)
- 2)・4) 奈良市教育委員会「平城京左京七条二坊五・六坪の調査 第385・387次」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 平成9年度(第1分冊)』(1998)
- 3) 奈良市教育委員会「平城京左京七条二坊十一・十二坪の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度』(1984)

## 20 平城京左京四条五坊四坪・三条遺跡の調査 第420次

1 事業名	共同住宅建設
2 届出者名	大和システム株式会社
3 調査次数	平城京第420次調査
4 調査地	奈良市三条本町7-21
5 調査期間	平成11年2月10日～3月9日
6 調査面積	240m <sup>2</sup>
7 調査担当者	秋山成人



発掘区位置図 (1/6,000)

### 8 調査概要

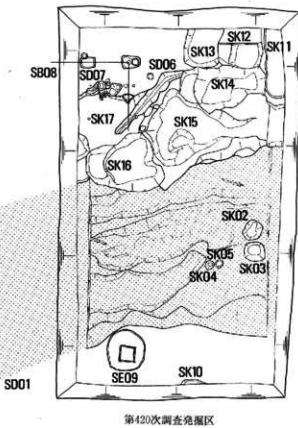
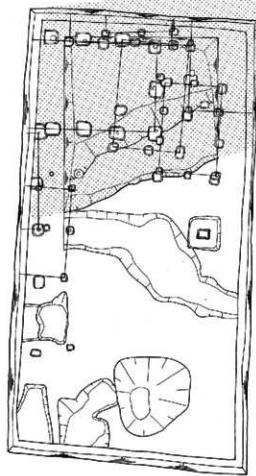
調査地は、平城京の条坊復原によると左京四条五坊四坪の南東に相当する。調査地の西側隣接地では昭和60年度に奈良市教育委員会が平城京第88次調査を行い、奈良・平安時代の掘立柱建物・井戸、弥生時代から古墳時代にかけての流路を検出している。今回の調査は坪内の様相と流路の性格を明らかにすることを目的に行なった。発掘区内の基本的な層相は、盛土、黒灰色土（作土）、灰色土、黒褐色土、灰白色砂質土、青灰色砂礫（地山）、黄灰色粘土（地山）である。遺構は発掘区南側に堆積する青灰色砂礫（地山）と黄灰色粘土（地山）上面で検出した。遺構検出面の標高は65.5mである。

検出した主な遺構には、弥生時代の流路（S D01）、土坑（S K02～05）、溝（S D06・07）、奈良・平安時代の掘立柱建物（S B08）・井戸（S E09）・土坑（S K10）、江戸時代の粘土採掘坑（S K11～17）がある。

S D01 発掘区中央で検出した東から西へ流れる流路である。埋土は灰色系の粘土と砂の互層で、堆積状況から大きく4時期に分かれる。S D01aは幅3.7m以上、検出面からの深さ1m、断面U字形をなす。S D01bは幅2.4m、検出面からの深さ0.9m、北東から西へ曲がり断面逆台形をなす。S D01cは幅10m、検出面からの深さ0.7m、断面U字形をなす。S D01dは幅6.5m、検出面からの深さ0.6m、概ね断面U字形をなすが溝底で逆台形状の落ち込みを検出した。落ち込みは平面不整形で、幅1～1.6m、深さ0.5mある。埋土は木屑・炭化物を含む褐色土である。遺物はS D01cから弥生時代中期の壺、S D01dから弥生時代後期の壺・甕・高杯・鉢・手焙形土器・杭・部材、サヌカイト製石器の剥片が出土した。

S K02・03 発掘区中央東辺で南北に隣接して検出した平面不整円形の土坑である。規模は径約1.1m、検出面からの深さは0.65mである。壁面はほぼ垂直に下降し底は平らで、砂礫層まで達している。埋土はいずれも暗褐色粘土で弥生時代後期中頃の壺・高杯が出土した。重複関係からS D01c埋没後掘削されたことがわかる。

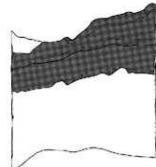
S K04・05 発掘区中央南側で東西に隣接して検出した平面不整円形の土坑である。規模は径0.4m、検出面からの深さ0.25mである。埋土は褐色土である。遺物はS K04から弥生時代後期後半の甕（搬入土器）1個体が横に寝た状態で出土した。重複関係からS D01c埋没後に掘削されたことがわかる。



0 10m

-147.070

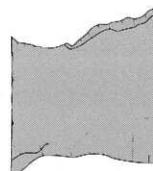
第88次・第420次調査遺構平面図 (1/200)



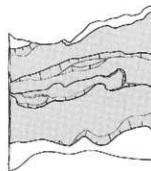
SD01 a (アミ部分)



SD01 b (アミ部分)

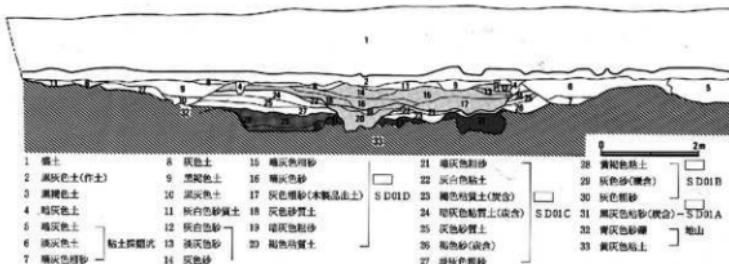


SD01 c (アミ部分)



SD01 d (アミ部分)

0 10m



発掘区西壁土層図 (1/100)

S D06 発掘区北側で検出した東から南西方向の溝である。幅0.7m、長さ4.8m以上、検出面からの深さ0.2mで、断面逆台形をなす。埋土は暗灰色砂、弥生時代後期半の高杯が出土した。

S D07 発掘区北西で検出した東西方向流路の一部である。幅0.55m以上、長さ1.9m以上、検出面からの深さ0.12mである。底は凹凸がある。埋土は灰白色砂で弥生土器の小片が出土した。

S B08 発掘区北西で検出した東西、南北2間以上の掘立柱建物で、南北柱筋の北から2つめの柱穴南半分は粘土探柵坑SK17の掘削により消滅する。柱間寸法は東西2.1m、南北1.8mである。埋土は暗灰色土で、土師器壺、須恵器杯の小片が出土した。

S E09 発掘区南西で検出した平面不整形形掘形の井戸で、掘形北辺で張出し、段が付く。規模は東西3.5m、南北4.3m、検出面からの深さ3.65mである。井戸枠は方形縦板組隅柱横棟留で内法1.65mである。枠内埋土は暗灰色粘土で、8世紀末から9世紀初めの土師器杯・皿・椀、須恵器杯蓋・壺、黒色土器椀、平瓦・埠、櫛・刀形・曲物底板が出土した。

S K10 発掘区南辺で検出した発掘区外南へ拡がる平面不整形な土坑である。規模は東西1.4m、南北0.27m以上、検出面からの深さ0.17mである。埋土は黒灰色土で、土師器、須恵器の小片が出土した。

S K11~17 流路SD01北側から発掘区北半に拡がる黄灰色粘土(地山)上面で検出した平面不整形な粘土探柵坑である。同時期に埋まつたらしく前後関係を認めることは難しく、形状から少なくとも7基の土坑が認められる。SK11は発掘区北東隅から発掘区外へ拡がり、西と南に隣接する土坑との間を隔てる黄灰色粘土(地山)が鞋状にのこっている。規模は東西1.0m以上、南北3.6m以上、検出面からの深さは壁面崩壊の恐れがあり底まで掘削出来なかったが0.2mまで確認した。SK12は発掘区外北へ拡がり、規模は東西2.1m、南北2.1m以上、底は東側で一段下がり、段差は0.19m、検出面からの深さ0.61mである。SK13はSK12の西側に位置し、発掘区外北へ拡がり、規模は東西1.9m以上、南北2.0m、検出面からの深さ0.2mと浅く底は平らである。SK14はSK12・13の南側に位置し、規模は東西4.5m、南北2.3m、底は東側で一段下がり段差は0.22m、検出面からの深さ0.94mである。SK15は検出した土坑群のほぼ中央に位置し、規模は最も大きく東西7.3m、南北4.1m、検出面からの深さ0.86mである。西側の底で、すり鉢状に窪み、東西の中央付近でくびれることから2基に分かれるとも考えられる。SK16はSK15の西

側に位置し、規模は東西3.3m、南北2.8m、底は東側で一段下がり、段差は0.17m、検出面からの深さ0.86mである。SK17はSK16の北に位置し、発掘区外西へ拡がる。規模は東西3.5m以上、南北2.5m、検出面からの深さ0.3mと浅く底は平らである。なお粘土探査坑SK12・14・16の坑内東側で約0.2mの段が付き1段低くなる。またSK12の西でSK13、SK16の北でSK17の浅い土坑があり、段が付き1段高くなっている。粘土探査坑群の埋土は上層から黒灰色土、淡黄灰色粘質土、黒灰色砂の順で、弥生土器の高杯、土師器の杯・高杯・皿・甕・製塩土器、須恵器の杯・皿・壺・甕、陶磁器の碗・壺・甕・すり鉢の小片、軒平瓦・平瓦、杓の柄、サヌカイト製石器の剥片・破片が出土した。

出土遺物には遺物整理箱に4箱分の瓦壺類、7箱分の土器類、2箱分の木製品・石器類がある。

瓦壺類 丸・平瓦が大半で、SK15から軒平瓦6685A1点、SE09から壇2点が出土した。

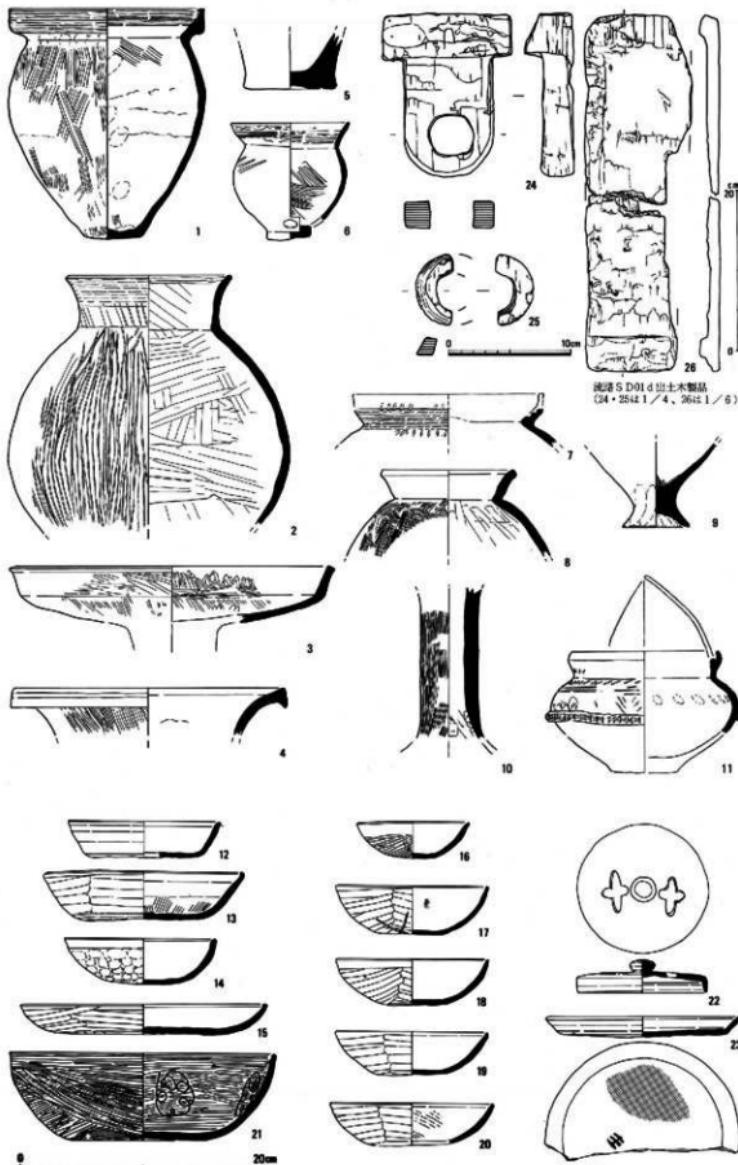
土器類 弥生時代と奈良から平安時代の土器が出土した。1はSK04出土の弥生後期後半の甕で口縁が受口状に立上がり、体部はハケで仕上げる。北近畿地域からの搬入品と思われる。2・3はSK02出土で、2は短頸甕で外反する短い口縁が付き体部外面ミガキで仕上げられる。3は弥生後期中頃の高杯の杯部でやや外反する短い口縁がつく。4~11はSD01出土で、4は弥生中期後半の広口壺で口縁端部垂下し凹線を施す。5は弥生前期の甕又は鉢の底部と思われる。6は弥生後期末の小型の甕で体部上半タキを残し、体部下半穿孔する。7は弥生後期後半の甕で受口状の口縁が欠損し擬口縁が残ったもので、口縁部外面と頸部に刺突文を施す搬入品である。8は弥生後期前半の甕で、口縁端部は面を残す、体部はハケ仕上げである。9は弥生後期後半の鉢で脚台が付く。10は弥生後期前半の高杯の柱状の脚部である。11は弥生後期後半の手焙形土器で受口状の口縁部の内側に蔽部が付く、体部は強く湾曲し刻目の突帯が付く。 (秋山成人)

SE09からは遺物整理箱に2箱分の8世紀末から9世紀初めの土器が出土した、土師器食器類の大半はc手法で調整されているが杯A(12)はa手法による。杯A(13)・皿A(15)・碗A(17~20)の底部内面から口縁部内面には、ハケメ痕跡が消されずに残っている。黒色土器A類碗(21)は、口径21.8cm、器高7.2cmとかなり大型である。須恵器蓋(22)の頂部には十の字状の透かしが一対、須恵器皿C(23)には「主」と読める墨書きがある。 (三好美穂)

木製品 SE01から弥生後期の木製品が出土した。24は栓と仮称される部材に分類され、長さ13.4cm、幅10.6cm、厚さ4.0cm、板目材を使用。25・26は用途不明品で、25は倒卵形の輪状に復原され、刀剣装具の一部になる可能性がある。現存長5.8cm、現存幅3.05cm、厚さ1.45cm、板目材を使用している。26は板状の材に同じ幅の突起が造出され梯子の転用材の可能性もある。長さ43.6cm、幅13cm、厚さ2.5cm、板目材を使用している。 (久保邦江)

まとめ 今回検出した遺構から重要な成果を得たのでまとめる以下とおりである。流路SD01は西隣接地の第88次調査で検出したSD01に続き、更に東西に延びることを確認した。土坑SK02・03は流路SD01c埋没後の流路南岸で、ほぼ垂直に砂礫層まで掘られており湧水も認められることから、弥生時代後期に水溜め又は井戸として利用されていた可能性が考えられる。流路SD01c南岸で検出した土坑SK04からは北近畿地域からの完形の搬入土器が横に寝た状態で出土し地域間交流を考える上で重要である。井戸SE09枠内からは長岡京期の土器が一括で出土したことから奈良・平安時代の土器の変遷を考える上で重要である。粘土探査坑群は階段状にすることにより深い部分の掘削を行なったと考えられる。 (秋山成人)

1)『木器集成目録(近畿原始編)』奈良国立文化財研究所 1993



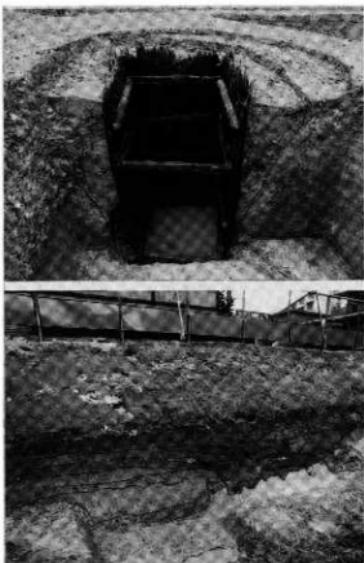
井戸 E 09出土土器 (1/4) 網目部分は透明油のしみ



発掘区全景（北から）



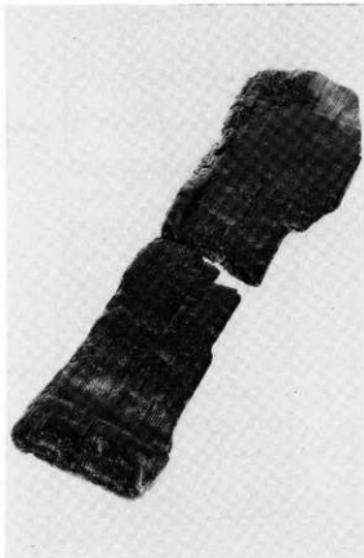
発掘区全景・溝SD01d（東から）



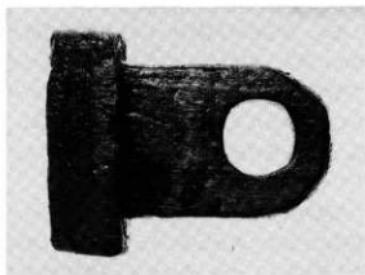
井戸 S E09（東から・上）流路 S D01西壁（南東から・下）



井戸 S E09出土土器



流路 S D01出土木製品（24・右下、26・左）、土坑 S K04出土土器（1・右上）



## 21 平城京右京一条二坊三坪の調査・佐紀遺跡 第421次

- 1 事業名 共同住宅建設
- 2 届出者名 福井孝治・福井敏子
- 3 調査次数 平城京第421次調査
- 4 所在地 奈良市二条町二丁目63-1
- 5 調査期間 平成11年3月3日～3月30日
- 6 調査面積 280m<sup>2</sup>
- 7 調査担当者 池田裕英



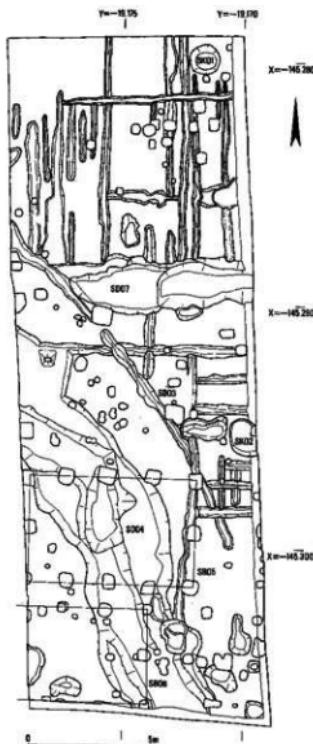
発掘区位置図 (1/6,000)

### 8 調査概要

調査地は、平城京の条坊復原によれば、右京一条二坊三坪のほぼ中央部に位置する。この坪ではこれまでに奈良国立文化財研究所によって141-14次、174-24次の2度の調査が行なわれている。いずれの調査も坪の北辺で一条条間路の南側溝と坪内の様相を明らかにする目的で行なわれたものであるが、南側溝の可能性のある幅0.5~1.0m、深さ0.2~0.3mの溝が検出されてはいるものの、「規模と形に問題がある」とされ、特定されるまでには至っていない。また、これらの調査では奈良時代の遺構の他に古墳時代の土坑や流路も検出されている。こういった周辺での調査成果から、今回の調査では三坪内の様相の把握の他に古墳時代の遺構の検出も目的として調査を実施した。

発掘区内の基本的な層相は、上から盛土、黒灰色土(旧作土)、灰白色砂質土(床土)、橙黄色土と続き、現地表面下約0.8~1.0mで橙黄色粘土の地山に至る。遺構はすべてこの橙黄色粘土の上面で検出した。遺構面の標高は概ね69.8~70.0mである。検出した主な遺構には古墳時代の流路、土坑、奈良時代の掘立柱建物、溝、上坑がある。以下でその概要について記す。

**古墳時代の遺構** S K01は直径約1.2mの平面円形の土坑で、深さは約1.0mである。古墳時代の上器が出上したが、小片が多く詳細な時期は不明である。S K02は東西1.1m以上、南北1.4mの



遺構平面図 (1/200)

不整円形の土坑で、深さは0.5mである。古墳時代の土器が出土したが、いずれも小片で時期を特定することができない。S D03は比高差からみて発掘区の北西から南東の方向に流れる素掘りの溝である。幅0.2~0.3mで、深さは0.1~0.3mである。出土した土器から溝が埋まっているのは古墳時代中期後半頃だと思われる。S D04は発掘区の西半部を占める流路である。比高差や現在の秋篠川の流れからみて北西から南東方向へ流れていると考えられる。溝幅は2.9~4.2m、深さは0.3~0.7mである。埋土は砂と粘土の互層になっていた。最下層には荒い砂の堆積がみられたことや、この層から出土した土器にはかなりの摩滅がみられることから水の流れが早いものであったことが窺える。この溝からは古墳時代の土器が遺物整理箱に30箱出土したほか、菅玉、石劍、砥石などの石製品も出土している。出土した土器のほとんどは土師器であるが、須恵器片もみられることや土師器の特徴からみて、溝が埋まっているのは古墳時代中期後半以降と思われる。

**奈良時代の遺構** S B05は発掘区の中央部で検出した桁行4間(6.8m)、梁間2間(4.4m)の東西棟の掘立柱建物である。柱間は桁行1.5~1.7m、梁間2.2mである。建物の主軸は国土方眼方位北でやや東に振れる。S B06は発掘区の南西部で検出した東西3間以上(3.4m)、南北2間(3.8m)の掘立柱建物である。おそらく東西棟の建物になると思われる。柱間は桁行が1.7m等間、梁間が1.9m等間である。建物の主軸は国土方眼方位北でやや東に振れる。S D07は発掘区の中央やや北よりで検出した。東西方向の素掘りの溝と考えているが、検出した長さが約9mにとどまることから、土坑である可能性も否定できない。幅は1.4~2.2mである。深さは西のほうが浅くなってしまっており0.1m、東端部の最も深い部分での深さは0.4mである。埋土からは奈良時代の土器や瓦が出土しているが、いずれも小片が多く、時期を特定することができない。S D07から北側では奈良時代の顯著な遺構を確認することはできなかった。古墳時代の遺構を確認していることからすれば削平されて失われたとは考え難く、当初から遺構が希薄であったのだと思われる。調査面積が狭いことから、確実なことは今後のこの坪内における調査例の増加を待たないといえないが、今回の調査では溝S D07を境に南北で遺構の在り方に差がみられ、S D07はS B01とほぼ軸を揃えることなどから考えると、この溝が宅地の中を区画するような遺構であった可能性は充分考えられよう。

(池田裕英)

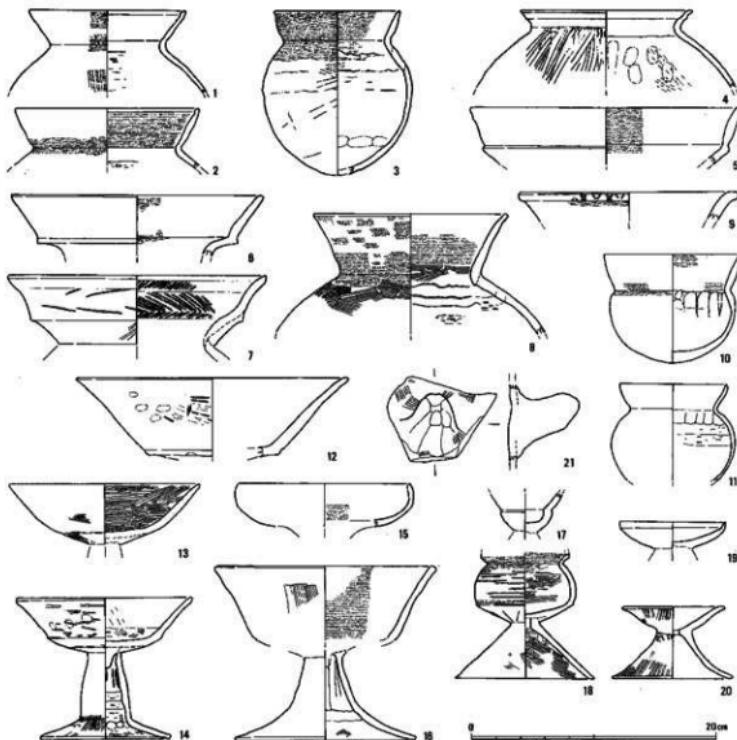
**出土遺物** この調査では、遺物整理箱にして約40箱の遺物が出土したが、量的に多いのはS D04から出土した古墳時代の土器である。S D04からは土器の他にも石劍や菅玉、砥石なども出土している。ここではS D04から出土した古墳時代の土器について記す。



発掘区全景（北から）



溝S D04（北西から）



溝S X18出土土器（1／4）

溝S D04から出土した土器には、布留式新相の特徴を示す上師器（甕・壺・高杯・器台・瓶）と田辺編年TK208～23の特徴を示す須恵器（甕・蓋杯・甌）がある。前者は埋土の各層から出土しており出土量は圧倒的に多いが、後者は上位の層から出土しており、出土量は極めて少ない。ここでは上師器について図示し、報告する。

甕（1～5）布留式甕には、口縁部が肥厚するもの（1・2）とそうでないもの（3）がある。その他、東海系（4）や山陰系（5）のものも含まれる。

壺（6～11、17・18）二重口縁壺（6・7）、短頸壺（8・9）、小形丸底壺（10・11）、小形台付壺（17・18）がある。7は東海系（柳ヶ坪式）である。9の口縁端部外面には×の施文がなされている。小形丸底壺には口縁部が高いもの（10）と低いもの（11）がみられる。小形台付壺は精製品である。

高杯（12～16）杯部の体部と口縁部の境に稜をもつもの（12）とそうでないもの（13～16）がある。15は上位の層準から出土したもので、古墳時代後期にもみられる形態である。

器台（19・20）小形品で、受け部が中実のもの（19）と中空のもの（20）がある。

瓶（21）角状の把手で、下位の層準から出土したものである。

（安井宣也）

## 22 平城京左京三条五坊三坪・油坂遺跡の調査 第422次

1 事業名	共同住宅建設
2 届出者名	株式会社リヴェール
3 調査次數	平城京第422次調査
4 調査地	奈良市大宮一丁目76,77-3,78-3
5 調査期間	平成11年3月15日～3月30日
6 調査面積	170m <sup>2</sup>
7 調査担当者	武田和哉・山前智敬



発掘区位置図 (1/6,000)

### 8 調査概要

本調査地は平城京の条坊復原では左京三条五坊に該当し、東四坊大路想定地から東側に約30m入った地点で、いわゆる外京に属している。同坪内における調査例としては、昭和58・59年に奈良市教委が発掘区の南側で2件の調査を実施しており(市54・84次調査)<sup>1)</sup>、このうち市54次調査では弥生時代から古墳時代にかけての流路を確認した。このほか同調査でも、奈良時代の条坊側溝(三条条間南小路南側溝)や建物跡などを検出している。さらに平成7年度には、奈良県立橿原考古学研究所が調査地の北約40mの地点で調査を実施しており、縄紋時代の土坑や奈良時代の建物跡、ならびに時期不明の南北方向に流れる溝を確認している。

調査地の層相は、基本的には盛土以下、黒灰色土(旧作土)・灰色土と続き、地表下約0.8mで黄灰色粘土の地山層に到達する。黄灰色粘土の堆積は概ね0.15m程度であり、その下層は暗褐色粘土の堆積になっている。遺構検出作業は地山上面(黄灰色粘土層上面)で実施した。地山上面の標高は64.8m前後である。検出遺構には、奈良時代以前の流路、奈良時代の井戸、建物がある。

S D01 発掘区東側で検出した流路。北から南へと流れる。幅は2m前後、深さ0.7～0.8m。断面はV字状を呈する。埋土は概ね3層に分かれ、上層には奈良時代の土器片が含まれていた。また、中・下層からは弥生時代末期から古墳時代初頭にかけての土器や石器が出土した。

S E02 発掘区中央やや東寄りで検出した井戸。掘形は平面隅丸方形を呈し、径約2.0m、深さは2.7mにも達する。井戸枠は2段に分かれていた模様であり、上段は木組みであったようであるが、抜き取られたらしくほとんど残存しない。下段は須恵質の井戸枠が残存していた。径93cm、高さ112cmを測り、他に類例を見ない巨大な製品である。井戸の埋土からは、奈良時代の瓦片、8世紀後半の土器および墨書き土器などが出土した。

S B03 発掘区南辺で検出した建物。南側と西側は発掘区外へと延びる。柱間は東西2間(5.4m)、南北1間(2.7m)分を検出した。

S A04 発掘区北半中央で検出した南北方向の構造。発掘区では柱間は3間分(7.2m)を確認。

S B05 発掘区北西隅で検出した建物。北側および西側は発掘区外へと延びる。柱間は東西1間(2.7m)、南北1間(2.4m)分を確認した。

このほか、発掘区北西部を中心柱穴をいくつか検出したが、建物跡として明確に把握できるものはなかった。

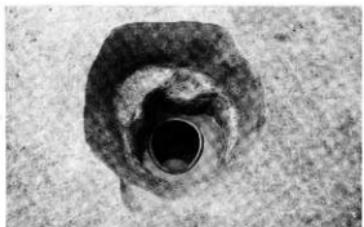
(武田和哉)



発掘区全景（北から）



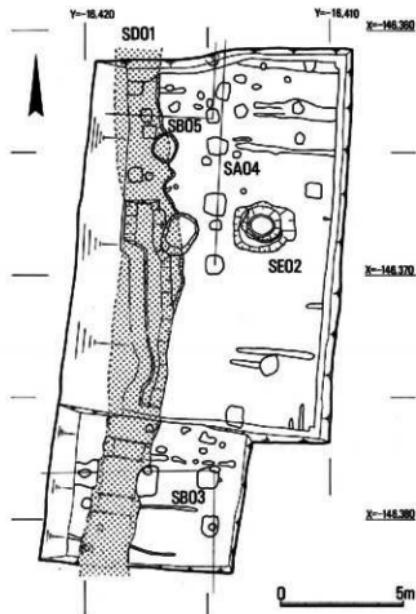
発掘区全景（南から）



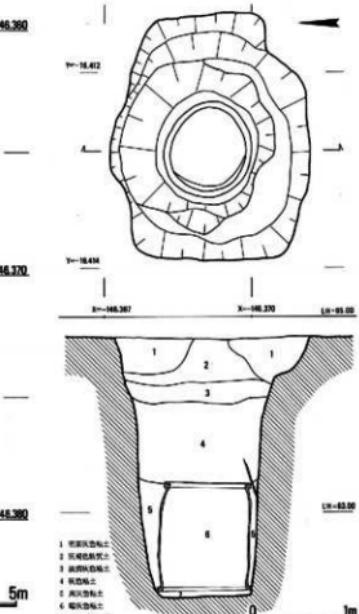
井戸S E02（東から）



井戸S E02断面（西から）

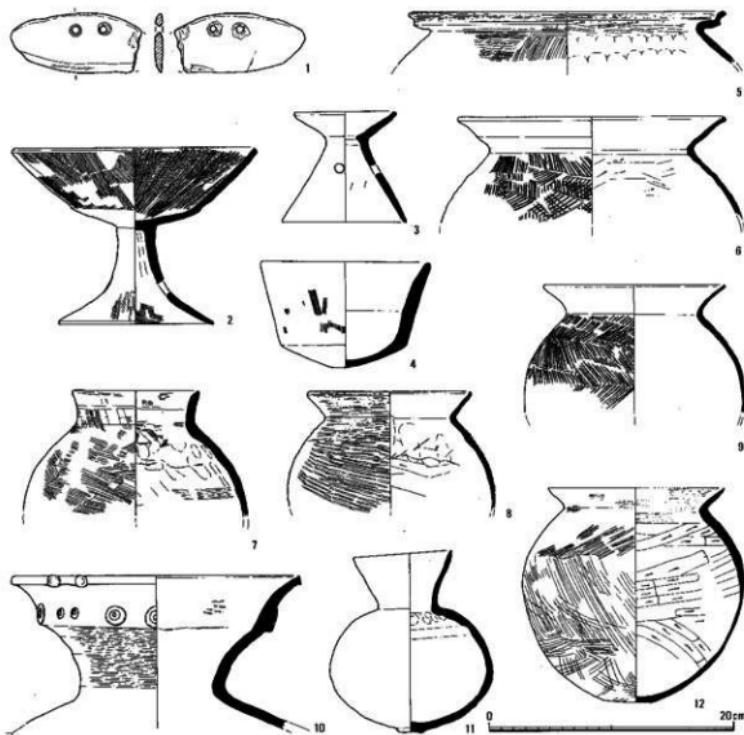


造構平面図 (1/200)



井戸S E01平面・断面図 (1/50)

S D01出土石器・土器 石器は石包丁(1)が1点ある。残存長10.7cm、最大幅4.8cm、最大厚0.7cm。刃部は片刃で、やや外湾する。紐孔は両側から穿孔されている。研磨は表面の方がていねいである。綠泥片岩製。土器は庄内式最終末段階の一括性の高いものと思われる。その一部を報告する。斂形土器(5～9・12)・壺形土器(10・11)・鉢形土器(4)・高杯形土器(2)・器台形土器(3)がある。2は口径19.6cm、器高15.0cm。口縁部は外上方に広がり、端部は外傾面を成す。口縁部外面はハケメ、内面はハケメの後にミガキ。脚部は裾広がり。二方に円孔。3は口径8.1cm、器高10.0cmの小形品。受け部は短く、外上方に広がる。雖部は外傾面を成す。脚部には三方に円孔がある。4は口径13.0cm、器高8.6cm。やや尖底で、口縁部は厚く、わずかに外傾して広がる。5はいわゆる口縁S字壺、体部を丸く。口径23.0cmの大形品。6～9は体部下半を欠く。6・9は、体部外面にいわゆる矢羽根状タタキメがみられる。6は口径21.4cm。口縁部はわずかに波状に外上方に広がり、端部は内側に丸く肥厚する。体部内面はケズリ。9は口径14.6cm。口縁部は外上方に広がり、端部は上方に軽くつまみあげ、外傾面を成す。タタキメの形状は6・9では異なり、9は細かい。7は口径10.1cm。口縁部はほぼ直立する。外面は口縁部・体部とともにハケメ。8は口径13.0cm。口縁部は外上方に広がり、端部は内側に丸く肥厚する。体部外面はや

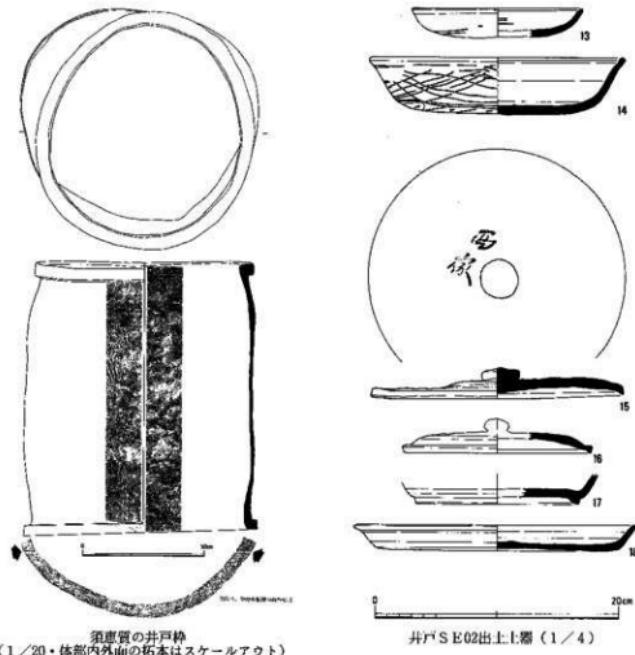


流路 S D01出土土器・石器 (1/4)

や左上がりの細かい平行タタキメ、口縁部外面と体部との境はナデ。堅敏に焼かれている。10は口径23.3cmの二重口縁の装飾壺。体部を欠く。口縁部は各段ともに外反気味に広がり、端部は上下にわずかに広がる。口縁部の上段と下段の境には円形浮紋と竹管紋が交互に、端部には円形浮紋が三方にそれぞれ2個1組で付く。11は口径8.0cm、器高14.5cm。球形の体部で、小面積の平底がある。口縁部はわずかに外傾して広がる。12は口径14.3cm、器高14.5cm。体部は球形で、底はわずかに平たい部分がある。口縁部は外上方に広がり、端部は薄くなる。体部内面はケズリ、外面はハケで、上半部に細かいタタキメが残る。堅敏に焼かれている。（森下浩行・松浦五輪美）

**S E02出土土器 遺物整理箱で約1箱分の奈良時代後半の土師器、須恵器が出土した。土師器には、杯A(14)、皿A(13)、高杯、壺がある。14は口径21.0cm、器高4.65cm、b<sub>2</sub>手法で調整している。13は口径14.0cmを測る。器表面が摩耗しており詳細は不明だが、口縁部外面にはヘラケズリとヘラミガキが見られる。須恵器には、杯A・B(17)、蓋(15・16)、皿C(18)、壺、壺がある。15は焼き歪みが著しい。頂部外面には「西像」と墨書きしている。18は口径23.3cm、器高2.1cm、完形品である。17・18の底部内面が摩耗しており、何等かの使用痕跡と考えられる。須恵器杯・皿・壺の破片の中には、墨が付着しているものが比較的多く見られる。この他に、体部内面に布の痕跡が残る製塙土器片と黒色土器の破片がある。**

**須恵質の井戸枠 S E02の下段の井戸枠として使用されていた。上部は直径89~98cm、下部は直径92~96cm、高さが108~112cmの円筒形である。器厚は縁帯部が6cm、体部は1.5~2.5cmを測**



須恵質の井戸枠  
(1/20・体部内外面の拓本はスケールアウト)

井戸S E02出土土器 (1/4)

る。製作順序は、まず下部の縁帯部を型枠を用いて作り、ある程度乾燥した後に粘土帯を少なくとも4～5段積み上げて上部を作りあげている。型作りと見られる箇所(下部の縁帯端面から体部にかけて約8cmの幅)には布目痕跡が残るが、体部内外面はその後の調整痕(タキ及びヘラケズリ)で布目痕が消されている部分が多い。下部の縁帯端面には、型枠の板材の合わせ目及び布の継ぎ合わせ目の痕跡も見られる。上部の縁帯部は粘土帯によるもので、ヘラケズリ後ヨコナデで調整されている。体部の内外面にはタタキ目と当て具痕跡が残るが、ナデ消されている箇所もある。平城京内では瓦質の円筒(径83cm、高さ42cm)を井戸枠として使用されていた例があるが、本例のような製品は全国的にも見られない。

(三好美穂)

まとめ 今回の調査で検出した溝SD01については、周辺の調査結果等も併せて検討すると、位置的には当調査地北隣の県平成7年度調査で検出された時期不明の溝と繋がる可能性がある。ただし、今回検出したSD01の埋土からは大量の土器が出土したのに対し、県調査で検出した溝は、報文によると出土遺物が少なく遭壊の時期が特定できなかったとある。さらに、溝の規模等についても、県調査では幅約7mであるのに対し、SD01の幅は約2mと下流であるのに極端に狭くなっている。また両地点の溝内の堆積状況も幾分異なっているようであるので、今後の隣接地での調査成果などを待って再検討すべきであろう。なおSD01とはほぼ同時期頃と推定される溝は、当調査地の南側で実施した市第54次調査でも検出されている。こちらの溝は北東から南北へと流れている。なお、市第54次調査地内では、SD01の下流付近に該当しそうな流路が検出されていないことから、SD01は当調査地の南付近で、西方向に流れの向きを変えている可能性が高い。

次に、井戸SE02に使用している須恵質の井戸枠については、枠内から出土した遺物や井戸枠本体の製作技法などからみて、奈良時代の製品と考えられる。しかし平城宮内も含めて、他にこのような規模の類例は発見されていない。

基本的には須恵器製作の技法を用いているが、底部の約8cmの範囲には布目が残っていて、瓦製作に使われる技法も採用している点が興味深い。こうした製品は形状からみて、他の目的で製作した製品を転用したと考えるよりは、むしろ当初から井戸枠として使用するべく製作されたものと推測される。またその大きさから判断すると、製作や運搬・設置に当たっては、相当の手間や困難が伴ったものと思われる。当然、奈良時代にこうした巨大品が恒常に生産され流通していたとは考えられず、特別な注文による生産であったと考えるべきである。

なお、この井戸SE02の設置を企図した者について推察できる直接の手掛かりはないが、製品の特殊性を鑑みると、当時の比較的富裕な階層に属した者か、あるいは巨大な特別製品の生産を直接指示できる立場にいた官人等が候補に挙げられる。さらには、設置の主体者と関係の深い邸宅・官司等の施設が坪内に存在していた可能性が指摘できる。こうした推察が可能ならば、今回の調査では検出したSB03は、柱間が9尺ある比較的大きい規模の建物跡であり、SE02との時期的な並行関係等の関連性が想起される遺構と判断されよう。(武田和哉)



周辺の調査状況図(1/1,500)

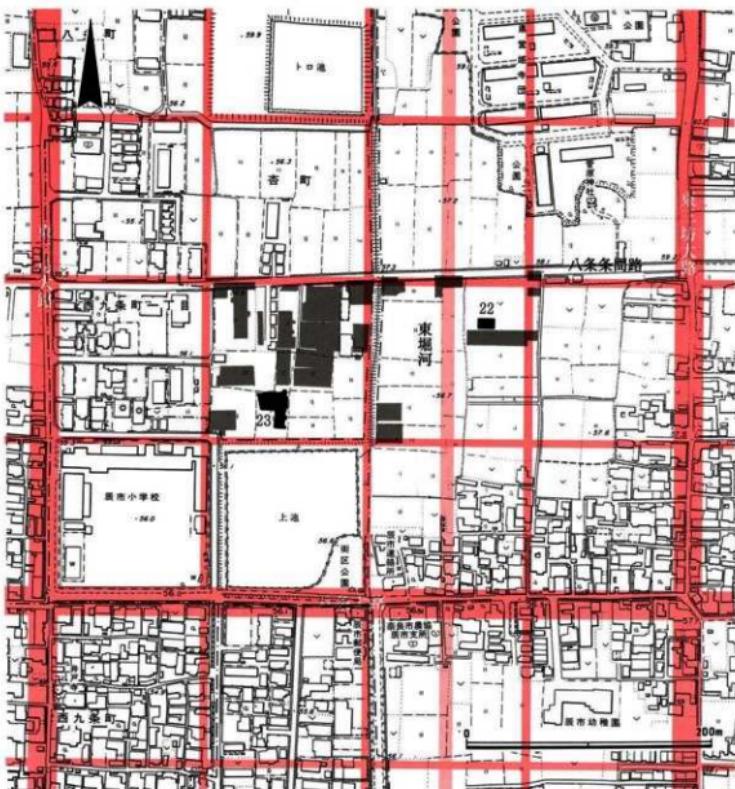
- 奈良市教育委員会「平城京左京三条五坊西四坊の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書昭和58年度』1984同「平城京左京(外京)三条五坊西四坊の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書昭和59年度』1985参考。このほかに、奈良造文化財研究所「左京(外京)三条五坊西四坊の調査」『昭和57年度半城宮跡発掘調査報告書(試験発掘)』1983などがある。
- 奈良県立原考古学研究所「奈良市平城京1995年度調査報告書 2.左京三条五坊三坪の調査」『奈良京遺跡調査報告書(第一回)』1996参考。
- 奈良市教育委員会「平城京左京三条三坊二坪の調査 第327-1-351-1次」『奈良市埋蔵文化財調査報告書平成年度』1997参考。

## 23 平城京東市跡推定地の調査

現在、平城京東市は左京八条三坊五・六・十一・十二坪の四坪域に比定する説が有力である。奈良市教育委員会では、昭和56年から平城京東市跡推定地の発掘調査を継続して実施して、今年で18年目となる。この調査により、推定地内の様相は序々に判明しつつあるが、東市と断定するには未だ資料不足と言わざるを得ないのが現状である。こうした経緯から本年度は六坪中央部の様相の解明に主眼をおいた（第23次）。なお、本年度は推定地内で個人住宅建設が届出されたため、この建設工事に伴って、発掘調査を実施した（第22次）。この概要についても報告する。

平城京東市推定地発掘調査一覧表

調査回数	事業名	申請者名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
第22次	個人住宅建設	宮田光規	東九条433-1、433-9	H10.09.30～H10.10.15	96m <sup>2</sup>	武田
第23次	重要遺跡範囲確認調査		杏町591	H11.01.06～H11.03.10	477m <sup>2</sup>	中島・久保清



東市跡推定地発掘調査位置図（1/4,000）

## (1) 東市跡推定地の調査 第22次

調査地は平城京の条坊復原によると、左京八条三坊十一坪の北半部中央やや東寄りに位置している。調査地の周辺では、以前から奈良市教育委員会の手により、東市跡推定地内の範囲確認調査が継続して実施されている。昭和58年には、調査地の北西約40mの地点で実施した市東市第4次調査では、東市内を貫通して南流する東堀河と十・十一坪境小路の交差点が検出され、東堀河に架けられた橋の橋脚部分を検出した。また昭和59年には調査地の南約5mの地点で実施した市東市第5次調査では、奈良時代の建物跡9棟などの遺構を検出している。このように調査地周辺で奈良時代遺構が良好に保存されていることが確認されていることから、本調査も当坪北半部分の奈良時代遺構の把握を目的として発掘区を設定した。

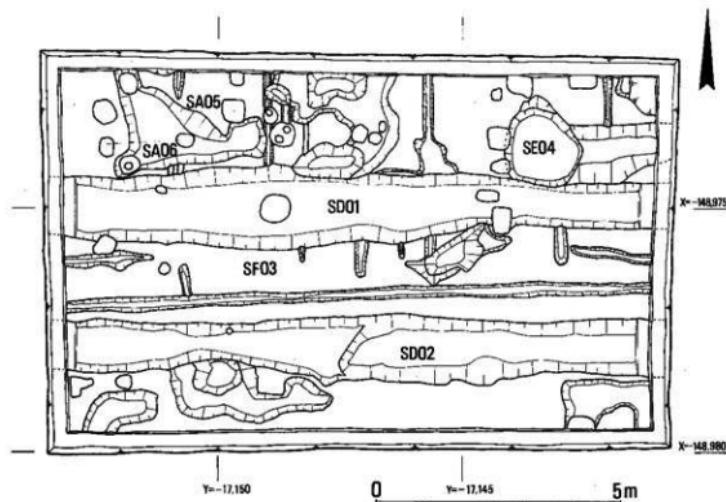
調査地の層相は、黒灰色粘質土、暗灰色粘質土(とともに旧作土)以下、茶褐色土、暗茶灰色土と続き、現水田面下約0.5mで黄灰色粘土の地山層に到達する。発掘区内における地山上面の標高は56.0m前後である。遺構検出作業は地山上面で実施した。検出した主要な遺構には、奈良時代の柱列、井戸、坪内道路とその両側溝等がある。以下主要遺構についてその概略を記す。

S D01 発掘区中央北寄りで検出した溝。後述の S D02 とは約1.8mの距離を保ちつつ、南北に平行に掘られている。幅約1.0m、深さ0.2~0.3m。埋土から奈良~平安時代の遺物が出土した。

S D02 溝の幅は0.9~1.2m、深さは0.1~0.4m。埋土からは奈良時代の遺物が出土した。

S F03 発掘区中央で検出した道路。後述の S D01・02に挟まれた部分で、約12m分を検出。幅は約1.8m。位置的には、|一坪の北辺から坪の南北長の約四分の一の距離分、南にきた地点に位置していることから、当坪内部の区画割りに伴って機能していた坪内道路と推定される。

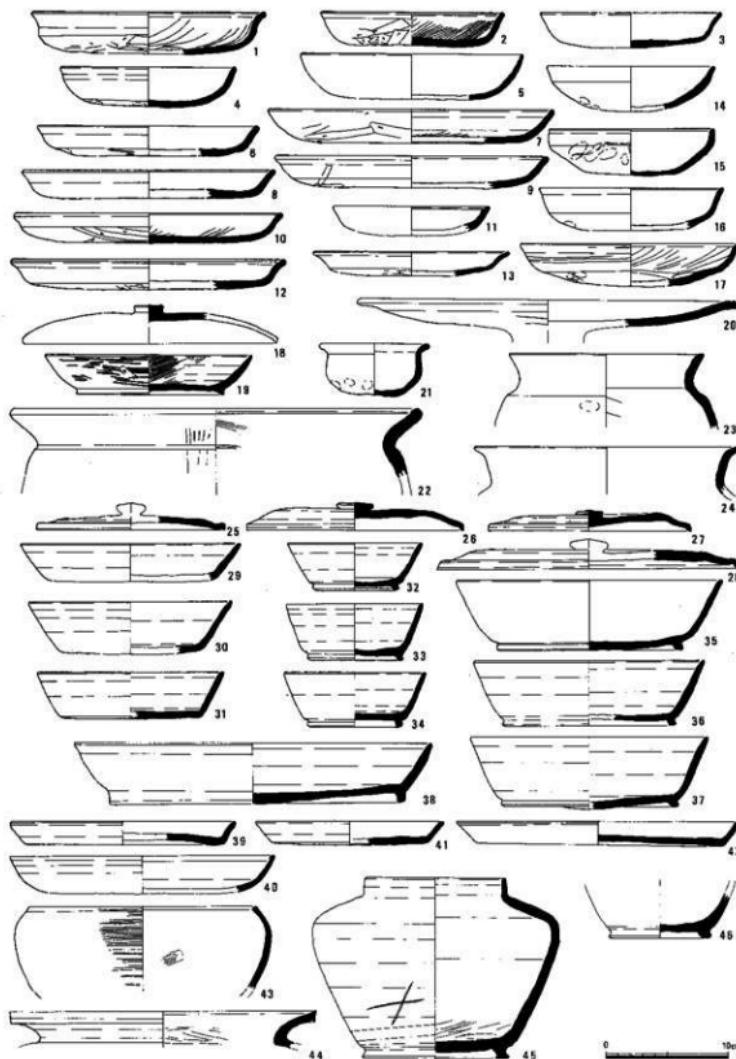
S E04 発掘区北東隅付近で検出した井戸。掘形は平面円形に近い形を呈する。深さは0.7m



遺構平面図 (1/100)

で、枠材は存在しなかった。わずかに板片が出土したことから、木組みの井戸枠が存在していたことを窺わせるが、その後抜き取られたものと思われる。埋土からは奈良時代の土器が出土。

S A05・06 発掘区北西部分で検出した掘立柱穴列。いずれも発掘区外に延びて、建物となる



溝S D01出土土器 (1/4、44は1/10、46は1/2)

可能性がある。05は柱間1間分(2.7m)、06は柱間3間分(5.4m)を検出した。これらは位置的には坪内道路S F03の北側溝SD01の北側にあり、十一坪の東辺から坪の東西長の約三分の一西へ入ったところに存在している。こうしたことから、あるいは坪内の区画割りされた一区画に入するための門であった可能性も否定できない。

(武田和哉)

**出土遺物** 奈良時代の土器類が遺物整理箱約7箱分が出土した。その内訳は土師器、須恵器、黒色製塙土器、奈良三彩である。そのうちSD02出土のものについて報告する。1~24は土師器、25~45は須恵器、46は奈良三彩である。8世紀後半末~9世紀初頭のものが中心を占めていると思われる。

(細川富貴子)

**まとめ** 今回調査を実施した左京八条三坊十一坪は、坪のほぼ中央を東堀河が縦貫しており、これによって東半部分と西半部分に分かれている。今回の調査地は東半部分に含まれているが、今回の調査で東西溝SD01・02および坪内道路SF03を検出したことから、当坪内の区画割りを知る上で、大変貴重な手がかりとなった。なお、これらの遺構の位置の国土座標値は、SD01溝心<X=-148,974.90 Y=-17,145.00>、SD02溝心<X=-148,977.88 Y=-17,145.00>およびSF03路面心<X=-148,976.35 Y=-17,145.00>である。

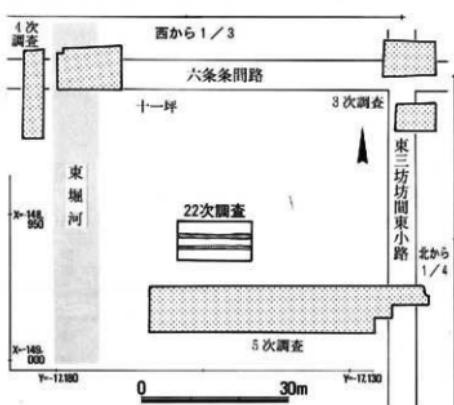
なお、調査で検出した遺構の重複関係等から見て、少なくとも2~3時期程度の変遷があったと思われる点には留意しなければならない。これについては隣接地での市東市第5次調査でも少なくとも4時期程度の変遷を確認したとの報告もある。さらには、今回の調査で検出した遺構の中には、明確に建物や柵列としてはまとまらないが、SD01・02と並存し得ない位置関係にある柱穴が数箇所で確認されている。こうしたことから、SD01・02およびSF03にみられるような坪内の区画割りが、奈良時代を通じて施行されていたものではなかった可能性が高い。

東市推定地内の調査は今年度までに合計23件を数えるが、十一坪内の調査は5件にとどまり、当坪の遺構の様相を把握し得たとは言い難く、今後の調査の蓄積が期待される。

(武田和哉)

1) 奈良市教育委員会『平城京東市跡推定地の調査II 第4次発掘調査概報』 1984。

2) 奈良市教育委員会『平城京東市跡推定地の調査III 第5次発掘調査概報』 1985。



左京八条三坊十一坪北東部概念図 (1/1,000)



発掘区全景（北から）



発掘区全景（西から）

## (2) 平城京東市推定地の調査 第23次

発掘区は六坪の南半部の東西中央部分にある。六坪では北半部と中央部分で過去数次にわたる発掘調査が行なわれ、おおよそその様相は明らかになっているが、南半部では第7次調査があるのみであった。今回の発掘区は第21次調査のすぐ南の水田で、第21次調査の成果の続きが期待された。また発掘調査は、当初水田の北側部分だけの予定であったが、建物の規模確認などのため東西南北方向に拡張した。

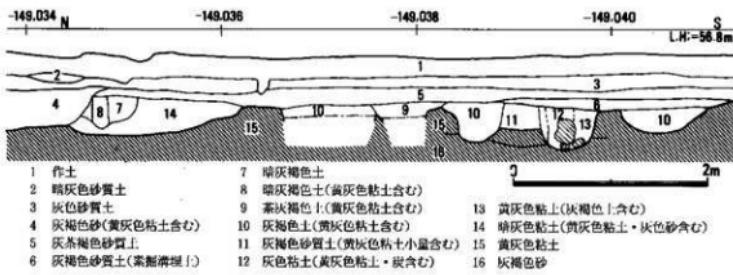
発掘区内の層相は北東側で上から作土、灰色砂質土、灰茶褐色砂質土の順で黄灰色粘土の地山にいたる。地山面は非常に緩やかな勾配で北西から南西方向に下がってゆき、その標高は北東側で約55.9m、南西側で約55.6mである。奈良時代と中世の遺構はこの地山上面で検出した。

調査の結果、掘立柱建物・塀、中世素掘小溝、土坑を検出した。

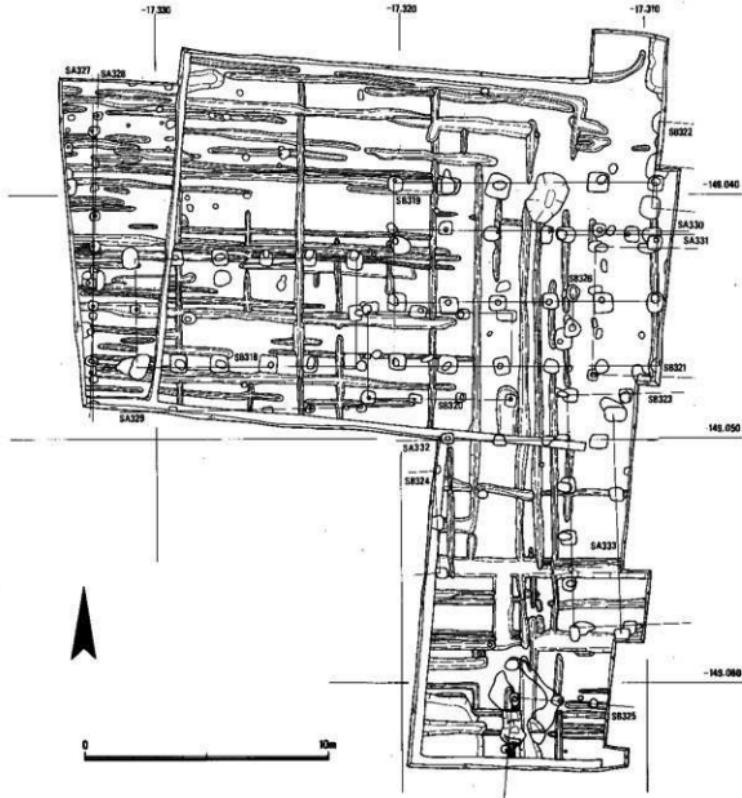
掘立柱建物は9棟、掘立柱塀は7条ある。各建物の詳細は表に記す。掘立柱建物群は重複関係から大きく3時期の変遷が考えられる。S B320・321等の2間×3間の小規模な建物の時期、S B318・323等の2間×5間の中規模の建物の時期、S B319・S A332・327・328の南面附帯建物を中心とした時期の3時期である。これらは柱穴出土の土器から8世紀の中頃から末までの時期のものと考えられる。これら掘立柱建物群は発掘区東側に続くものが多く、発掘区北東側の第18次調査でも南側に続く建物群を検出しており、発掘区東側には数多くの建物が存在することが想定される。また発掘区北側の第21次調査で確認された縦柱建物は今回の発掘区には続かないことから、東西2間×南北2間か3間であることがわかる。一方発掘区北側の第21次調査で確認された溝S D310は確認出来ず、両発掘区間の畦の下で終了していることがわかる。また同調査で想定されたS D307・308間の坪内道路は、その南延長線上に建物が存在することから、8世紀代には六坪南辺につながっていないと考えられる。また同調査で確認された奈良時代以前の旧河道の続きも今回は検出できなかった。

中世素掘小溝は多数検出している。東西方向のものが南北方向のものに比べて数が多いが、東西方向の溝は発掘区西半部に集中しており、その東側では南北方向の溝のみとなる。周辺の発掘調査でも中世素掘小溝は、東西か南北いずれかの方向の数が勝る場合が多い。これら溝の東西または南北優位の方向性は、当時の農地区画の影響と考えられよう。

出土遺物には土器類が遺物整理箱2箱、瓦類が遺物整理箱2箱ある。土器類はほとんどが奈良時代の土器で、瓦類には丸瓦・平瓦と壇が1点あり、軒瓦は出土していない。(中島和彦)



東壁土層図 (1/50)



造構平面図 (1 / 200)

独立柱建物・附一覧表

造構番号	施方向	規格 (桁行×梁間)	桁行全長 m	梁間全長 m	桁行柱頭寸法 m	梁間柱頭寸法 m	高の出 m	備考
S B318	東西	5×2	9.0	4.5	1.8	2.25		
S B319	東西	5×3	10.75	4.9	2.15	1.85	2.6	南面付き建物
S B320	東西	3×2	5.8	3.6	1.9-1.9-2.0		1.8	
S B321	南北?	3×2上	5.3	2.1以上	1.8-1.4-2.1	2.1-?		
S B322	?	2×12上	3.6	?	1.8	?	?	独立柱建物か?
S B323	南北	5×2以上	9.5	2.4以上	1.85-1.85-2.1	2.4-?		
					1.85-1.85			
S B324	東西?	?×2	?	4.2	?	2.1		
S B325	東内?	2以上×2以上	3.3以上	2.1以上	1.8-1.5-?	2.1-?		
S B326	南北	1	1.5			1.5		門か?
S A327	南北	4以上	9.6以上		2.4			
S A328	南北	5以上	10.5以上		2.1			
S A329	東西	4以上?	7.8	2.7-2.7-1.8-2				
S A330	東西	5以上	10.5以上		2.1			
S A331	東西	1以上	2.7以上		2.7			
S A332	東西	4以上	8.4		2.15			S B319と柱筋をそろえる
S A333	南北	3以上?	9.0	3.2-1.9?-1.9?				北面面付き建物の西妻柱列か



発掘区全景（北東から）



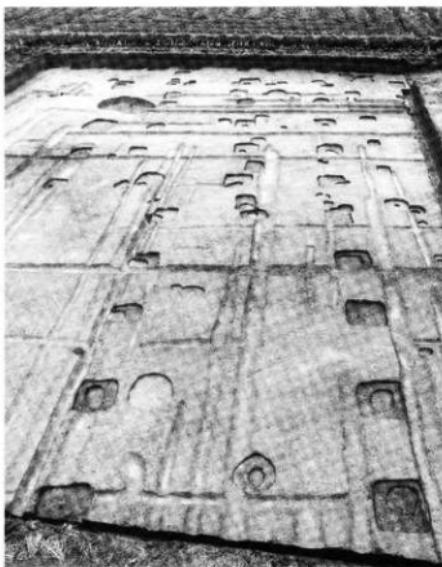
南拡張区全景（北から）



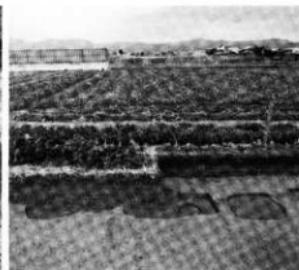
西拡張区全景（北から）



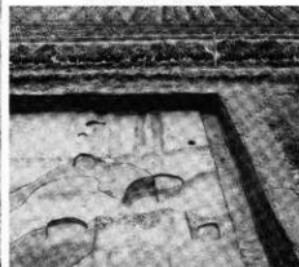
建物S B319（西から）



建物S B318（西から）



建物S B322（西から）



建物S B325（西から）

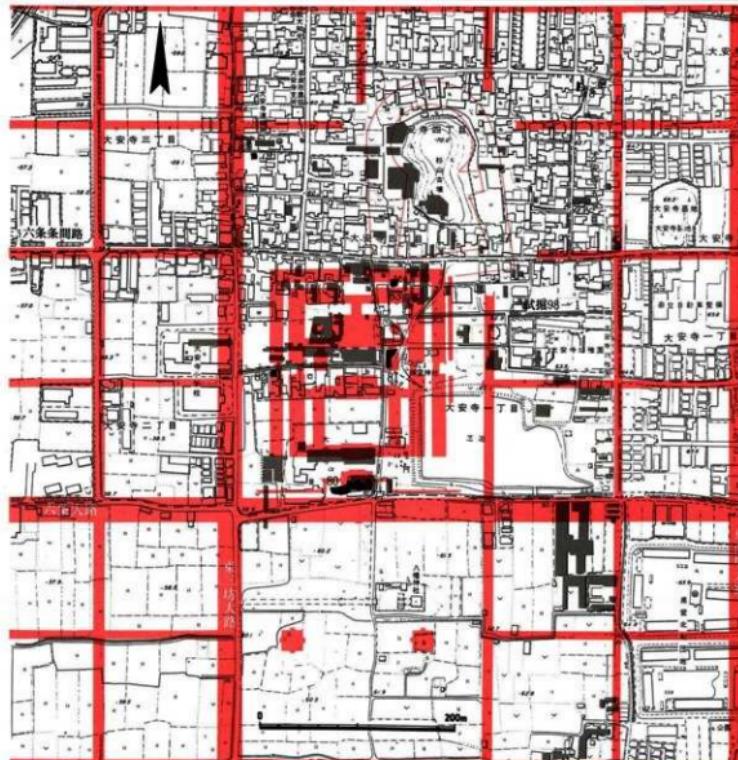
## II 平城京内寺院跡の調査

## 1 史跡大安寺旧境内の調査

史跡大安寺旧境内では、第78次～第83次の6件の発掘調査を実施した。他に平成9年度から調査を実施していた第77次調査についても報告する。また、試掘98-1次調査では、埠積井戸や壇上積基壇を確認し、大安寺の伽藍復原に関わる重要な成果を得た。この調査についても報告する。

史跡大安寺旧境内発掘調査一覧

調査次数	現状変更内容	申請者名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
第77次	南大門・便所建設	(京)大安寺	大安寺二丁目1299-1	H10.03.09～H10.04.21	193m <sup>2</sup>	森下・原田重
第78次	個人住宅建設	大西信之	大安寺四丁目1089	H10.04.01～H10.04.14	28m <sup>2</sup>	武田
第79次	農業用倉庫建設	武野政信	大安寺四丁目1044-3	H10.04.06～H10.04.18	70m <sup>2</sup>	久保清
第80次	庫裏建設	(京)大安寺	大安寺二丁目1299-1他	H10.04.23～H10.05.15	82m <sup>2</sup>	原田重
第81次	史跡大安寺旧境内保存整備事業	市教育長	大安寺二丁目1288-1、-2	H10.07.02～H10.08.06	102m <sup>2</sup>	立石・細川
第82次	個人住宅建設	服部 修	大安寺二丁目1310-1	H10.11.18～H10.11.27	23m <sup>2</sup>	武田
第83次	個人住宅建設	東井素生	大安寺一丁目1153、1154-2	H11.01.06～H11.01.18	50m <sup>2</sup>	武田・山前
試98-1次	公共下水道施設工事	奈良市長	大安寺一丁目地内	H10.03.16～H10.05.15	L=265.3m	中島・久保清・山前



史跡大安寺旧境内発掘調査位置図（1／5,000）

## (1) 南大門・大安寺遺跡の調査 第77・80次

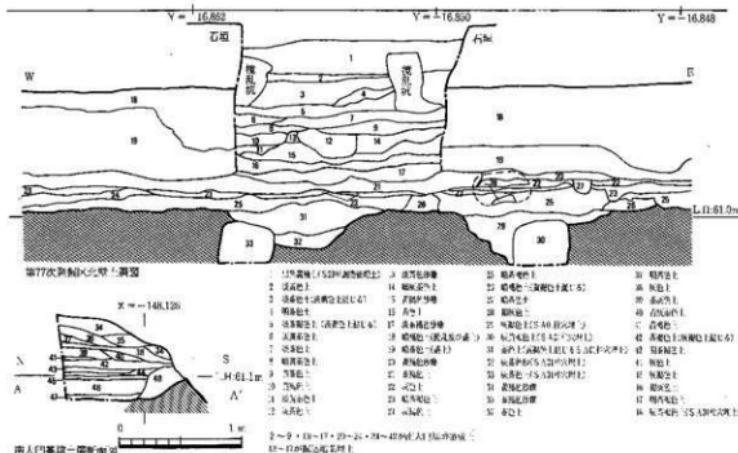
### I 調査の目的

大安寺南大門は昭和29年の発掘調査により桁行5間・梁間2間で、柱間は桁行・梁間とともに17尺等間の規模であったことが判明している。<sup>13)</sup> 柱間寸法は平城宮朱雀門と同規模であったことがわかる。平成元年の奈良市第38次調査では未発掘であった中央間の北側部分についての調査が行われ、礎石据付穴の観察から後世に一度礎石の据え変えが行われていたことを明らかにした。<sup>14)</sup>

これらの成果を受けて、第77次調査は南大門南辺の様相を把握するため、想定される南辺基壇部に沿って東西に長い発掘区を設けた。また昭和29年の発掘調査で確認された礎石据付穴の位置との整合性をはかるため、南大門南側柱列の中央・両端・東から2つ目の礎石据付穴の位置に発掘区を設定し、再調査を実施した。この後すぐ開始された第80次調査では第77次調査地の西に隣接して調査区を設け、南大門両脇にあると想定されている府直屋を主とする南大門南西の遺構の様相の把握を目的とした。また昭和29年の発掘調査で確認された基壇外装の位置との整合性をはかるため、南大門基壇北辺中央石階取付部を再調査した。

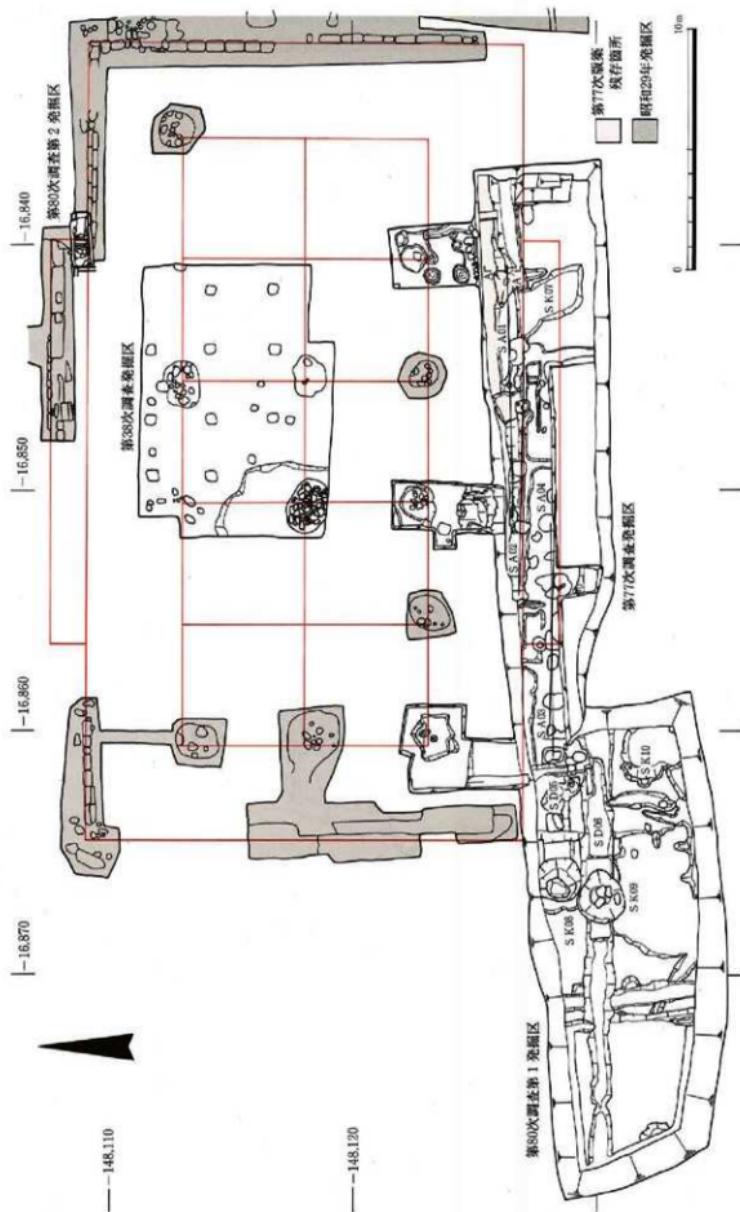
### II 調査地の層相

第77次発掘区北辺の基本的な層相は、地表から暗褐色土（盛土）、暗茶色土（盛土）、暗茶褐色土と続き、地表下1.4~1.7mで黄褐色粘土あるいは黄褐色砂質土の地山に至る。地山面の標高は60.6~60.9mである。第77次発掘区北東隅では、地表からの深さ約0.5m、北壁から約0.6mの幅で基壇築成土が残存していたが、西に行くほど中・近世の削平が大きく、残存していなかった。第77次発掘区南辺の基本的な層相は、地表から暗褐色土（盛土）、灰色砂質土（旧作土）、淡茶色砂、灰色砂質土（旧作土）、灰茶色土、灰色粘土（旧作土）と続き、地表下1.5~1.8mで黄褐色粘土の地山に至る。南辺についても中世から近世に大きくなされ削平されており、基壇外装は全く残存していなかった。地山面の標高は60.3~60.6mである。



第77次発掘区土層図 (1/80)

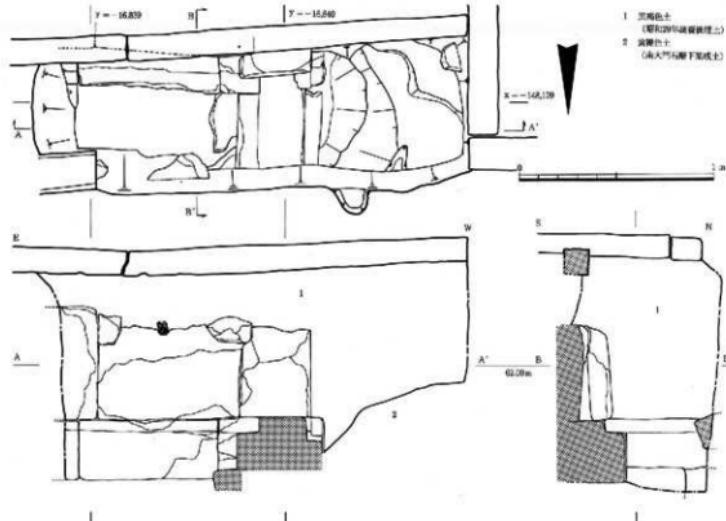
进排平面图 (1/200)



第80次発掘区東半の基本的な層相は第77次発掘区南辺と同様であったが、西半では近世の水田耕作時にさらに0.5mほど地下げされていた。西半の地山は黄褐色粘土で、標高は約60.1mである。

### III 検出遺構

**南大門** 第77次発掘区北東隅から中央部にかけて南大門基壇築成土が残存していた。ただし中央部では北壁面で確認できたのみである。基壇築成土は5cmから15cmの厚さで丁寧に突き固められた版築によるものである。基壇築成土を削平する攪乱の壁面に沿って断面調査を行うことにより掘込地業を深さ約0.3mまで確認できた。掘込地業上部は版築によるものであったが、下部では約23cmと、やや厚い層がある。基壇築成土の下で東西方向の掘立柱列2条を検出した。これら2条の掘立柱列は新旧あり、古い方をSA01、新しい方をSA02とした。SA01・SA02とともに南大門推定基壇南辺に位置する。このことからSA02に関しては基壇築成の際の堰板留めの添柱列と考えられる。SA01に関しては、断面部分の観察から、柱穴掘形が掘込地業の掘形により削平されていることが判明したため、掘込地業の計画ラインを設定したものか、あるいは単に南大門に先行する掘立柱塀の可能性が考えられる。SA01の柱穴は4穴確認した。柱間は西から1.8m-4.8m-3.7mである。SA02の柱穴は5穴確認した。柱間は西から2.7m-2.4m-2.7m-2.4mである。南大門の柱位置に設定した3つの再発掘区では、それぞれ礎石据付穴を確認し、柱の位置と今回の発掘区との位置関係が明らかになった。また南辺中央の礎石据付穴の南西に小柱穴を新たに確認した。第38次調査でも南大門礎石据付穴の外周に各々4箇所づつ配置された足場の小柱穴が確認されていることから、今回検出した小柱穴も足場穴の可能性が考えられる。南大門基壇北辺中央石階取付部の再発掘区では、凝灰岩製基壇外装である地覆石・羽目石・束石を確認し今回の発掘区との位置関係が明らかになった。地覆石は東・中央・西の3個と、石階耳石下の1個の計4個を確認した。東側の地覆石はその大部分が発掘区外である。中央の地覆石は長さ約



第80次調査第2発掘区南大門北辺基壇 (1/25)

71cm、高さ約30cmである。前面上角は高さ6cm、幅12cmに欠き込んで面を施す。西側東石下の地覆石は長さ約54cm以上、高さ約26cmで、その直下の栗石で底上げしている。前面上角は高さ約6cm、幅約12cmに欠き込んで面を施す。耳石下の上角は高さ約10cm、幅約6cmに欠き込んで耳石との相欠き仕口とする。石階耳石下の地覆石は長さ約55cm以上、高さ約26cmで、その直下の栗石で底上げしている。幅約42cmである。前面上角は高さ約6cm、幅約12cmに欠き込んで面を施す。後面上角は高さ約12cm、幅約7cmに欠き込んで耳石との相欠き仕口とする。また、東石直下の部分は高さ約6cm、幅約12cmに欠き込んで、西側東石下の地覆石との相欠き仕口とする。なお、後面上角南西隅の部分は棒状の物を突き刺し動かしたときに割れたとみられる欠損部分がある。耳石が残存していない状況から、耳石をはずす時に欠けたものか、あるいは基壇外装の化粧石も、礎石同様一度据え変えられたものと想定される。羽目石は東・西の2個確認した。全体形のわかる西側のものは残存高70cm、幅約48cmである。東石は1個確認した。残存高約46cm、幅約30cmで厚さは約12cmである。側面後方を欠き込んで羽目石に納めるようになっている。今回の調査では、石階耳石下の地覆石の直下で花崗岩製の栗石、南・北2個を確認した。南側の栗石は長さ約30cm以上、幅約12cm以上、厚さ10cmで、耳石下の地覆石と、東石下の地覆石の下に据えられている。北側の栗石は長さ約10cm以上、幅約15cm以上、厚さ約10cmで、耳石下の地覆石の下に据えられている。南北2個の栗石の間の埋土から軒平瓦6712B 1点が出土した。

その他の遺構 古墳時代の十坑、中世の掘立柱列・土坑・溝、近世の土坑・溝を検出した。

S A03は東西4間(9.6m)以上の中世の掘立柱列である。柱間寸法は西から2.7-2.7-1.5-2.7mで、東西棟掘立柱建物の北側柱列の可能性もある。S A04は東西4間(9.6m)の掘立柱列である。柱間寸法は2.4m等間である。遺構の重複関係からS A03より古いことがわかる。S D05は南北方向の溝である。幅約3m、長さ6m分を検出し、北側・南側ともに発掘区外へと続く。検出面からの深さは約0.4mである。埋土は上・下2層に分けられ、上層は茶色砂質土、下層は茶灰色土である。溝内埋土から12世紀中頃から後半にかけての土師器・須恵器・瓦器と、軒丸瓦6304D 1点・6138C a 2点・平安時代以降2点、軒平瓦6712A 1点が出土した。遺構の重複関係からS D06・S K10より古いことがわかる。S D06は東西方向の溝である。幅約1.5m、長さ約18m分を検出し、東・西側ともに発掘区外へと続く。検出面からの深さは約0.4mである。埋土は上・中・下3層に分けられ、上層は灰色砂質土、中層は茶灰色砂質土、下層は茶灰色粘土である。溝内埋土から少量の土師器・須恵器が出土したが細片のため詳細な時期は不明である。他に溝内埋土から軒丸瓦6138E 1点・軒平瓦6712A 1点が出土した。遺構の重複関係からS K10より古く、S D05より新しいことがわかる。S K07は東西約1.8m、南北約2.6m以上の平面形闊丸長方形の土坑である。検出面からの深さは約0.2mである。埋土は茶褐色砂質土である。坑内埋土から古墳時代中期の埴輪片が出土した。遺構の重複関係から南大門基壇築成より古いことがわかる。S K08は東西約2.2m、南北約2.0mの平面形円形の土坑である。検出面からの深さは、約0.6mである。埋土は上・下2層に分けられ、上層は茶灰色砂質土、下層は灰色土である。坑内埋土から11世紀後半から末頃にかけての土師器・須恵器・瓦器碗・白磁碗・軒丸瓦6138E 1点・6304D 2点、軒平瓦6690A 1点、6712A 4点、新型式大型軒平瓦1点が出土した。遺構の重複関係からS K09より古いことがわかる。S K09は東西約2.2m、南北約2.0mの平面形円形の土坑である。検出面からの深さは約1.2mである。埋土は上・下2層に分けられ、上層は暗灰色砂質土、下層は暗灰色粘土である。坑内埋土から13世紀中頃の土師器・須恵器・瓦器碗・軒丸瓦6138C a 1点、軒平瓦6690A 2点・6712A 3点が出土した。また上層の暗灰色砂質土からは、方0.5mから1.0m

の凝灰岩切石の破片が5個出土した。遺構の重複関係からSK10より古く、SD06・SK08より新しいことがわかる。SK10は東西約4.5m以上、南北約4.1m以上の平面形不整形の土坑である。東・南側とともに発掘区外へと続く。埋土は4層に分けられ、上から1層目が暗茶灰色砂質土、2層目が暗灰褐色粘土、3層目が灰色粘土、4層目が灰色砂である。深さは0.1m～0.4mである。坑内埋土から少量の土師器・須恵器・国産陶磁器が出土したが細片のため詳細な時期は不明である。ほかに坑内埋土から軒丸瓦6304D1点・平安時代以降4点（うち2点寺名軒丸瓦）、軒平瓦6712A1点・6717A1点・平安時代以降2点・台座形土製品が出土した。

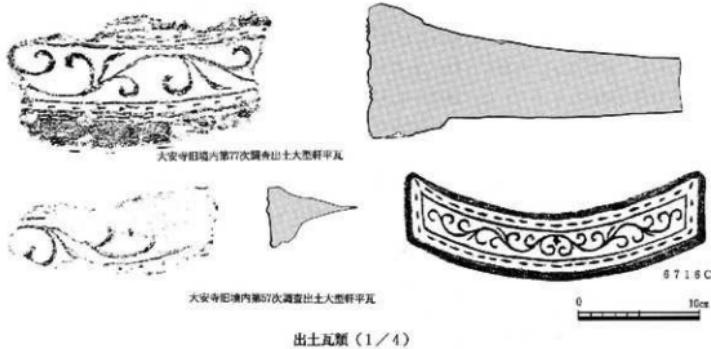
#### IV 出土遺物

瓦塊類 瓦塊類は、遺物整理箱で143箱分出土した。ここでは軒瓦について記す。

軒丸瓦の内訳は6137A1点、6138Ca4点、6138Cb1点、6138C1点、6138E3点、6304D12点、型式不明4点、平安時代以降23点である。軒丸瓦では6304Dが比較的多く出土している。平安時代以降の軒丸瓦では、瓦当面に寺名をあらわしたものが多い。内訳は「大安寺」と縦書きしたもの（12点）、「大安寺」の三字を「大」を頂点にし、「安」を右、「寺」を左に据えたもの（1点）、「大安寺塔」の4文字を各々圓線で囲んだもの（7点）で、平安時代以降の軒丸瓦23点のうち、20点が寺名をあらわしたものである。これまで奈良市が調査した大安寺旧境内全体でも、これら寺名軒丸瓦は8点のみであることから、南大門地区に集中していることがわかる。これら大安寺で出土する「寺名軒丸瓦」は鎌倉時代のものと考えられており、文永5年（1268）の宗性による南大門修造の際に製作されたものと思われる。

軒平瓦の内訳は四重弧紋1点、重弧紋1点、6661A1点、6663B3点、6664A1点、6690A5点、6712A23点、6712B4点、6712C1点、6716C1点、6716F2点、6717A3点、新型式大型軒平瓦1点、型式不明6点、平安時代以降21点である。新型式大型軒平瓦の瓦当紋様は6716Cに似ていることから、全体の紋様は3回反転均整唐草紋で、右第2単位付近の破片とおもわれる。頸は段頸で、頸部は横方向のヘラケズリ、のちヨコナデを施す。凸面平瓦部は、縦方向のヘラケズリ、のちヨコナデを施す。凹面は瓦当付近を横方向にヘラケズリするが、平瓦部には細かい布目痕を残す。平成5年度の大安寺旧境内の調査（第57次）でも、本資料と同範的小片があったことが判明した。<sup>4)</sup> 6716Cを参考に全体の大きさを復原すると、瓦当面の高さは13cm程度、幅は6716Cの約3倍の60cm程度の大きさと考えられる。

（原田憲二郎）

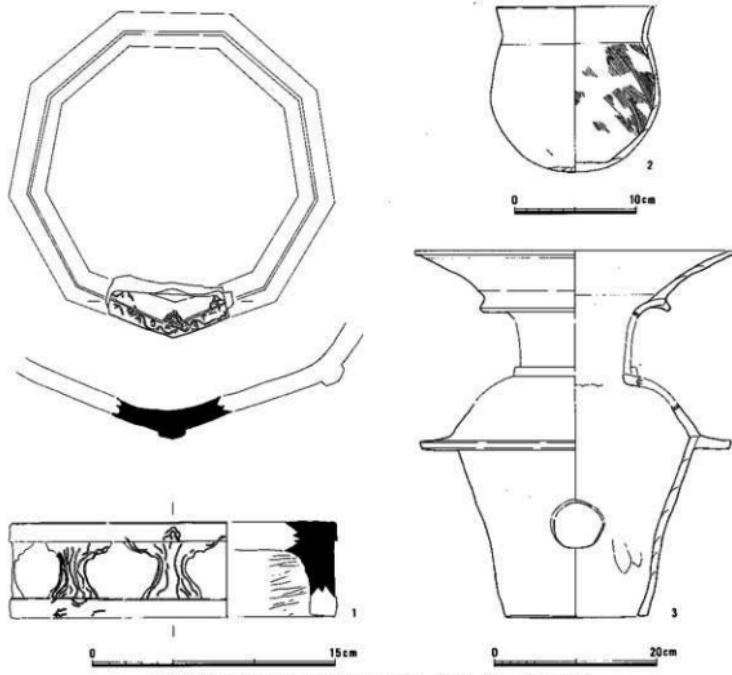


土器類 墳輪、土師器、須恵器、瓦器、白磁、国産陶磁器、土製品がある。以下、主なものについて述べる。1はSK10下層から出土した。平面が1辺7.0cmの九角形、高さが5.8cmに復原できる。焼成はやや軟質の須恵器に近く、色調は灰白色である。側面に自然釉がかかる。上面は平坦で、外形の九角形に沿った直線で3つ以上の区画に分けている。一番外線には唐草紋、その内側の区画には九角形の頂点に宝相華紋、辺の中心付近にも何か線刻をしている。その内側は欠損していて装飾の有無は不明である。表面が薄紫色に変色しており、着色している可能性がある。側面には格狭間を削り出して作る。格狭間の上部中心には削り出した格狭間の続きを描いたような線刻が見られる。格狭間内部に装飾ではなく、格狭間と格狭間の間にはその外形に沿うような線刻を施す。九角形頂点部分の側面の上部は宝相華紋、下部には形状不明の線刻を施す。上面、側面ともにその線刻の紋様はかなり崩れている。内面は横方向の強いナデで調整する。形状からみて何かの台座ではないかと思われる。

(細川富貴子)

2・3はSK07から出土した古墳時代の遺物である。2は土師器甕で、復原口径12.8cm、器高13.6cm。底部外面にケズリ、内面にナメハケ調整を認める。外面の一部に黒斑がある。3は壺形埴輪である。肩部と頸部をほとんど欠失するが、口径約39cm、器高約45cmの同一個体に復原できる。底部と肩部の壇に刻み目を入れて接合し、ここにツバを貼り付ける。底部には対向する2つの円形透孔と黒斑がある。他に、川西編年第Ⅲ期の円筒埴輪片が共伴する。

(鎌方正樹)

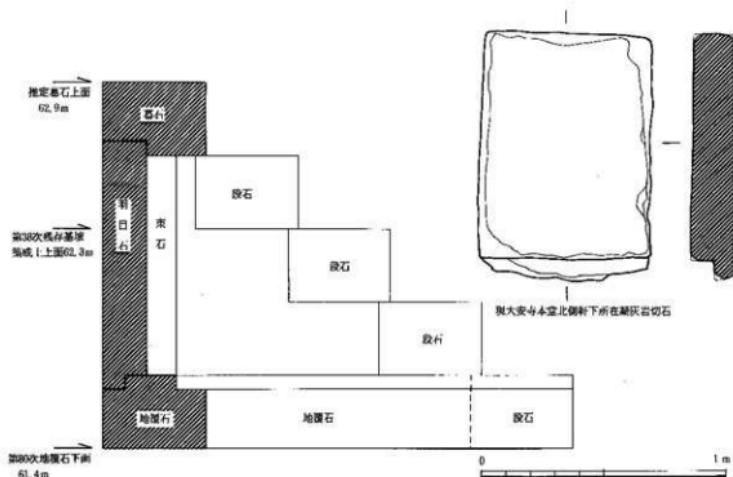


土坑SK07・SK10出土土器類 (1は1/3、2は1/4、3は1/6)

## V まとめ

南大門南辺は、中・近世に大きく削平をうけていたことが判明した。しかし基壇築成の際の堰板留めの添え柱列や掘込地栄など、南大門基壇築成に関する新知見を得た。基壇北辺の再発掘区では地覆石の下に栗石を据える工法であったことが判明した。しかし、耳石下の地覆石の欠損状況、栗石の間から天平19年以降の軒平瓦が出土したこと、過去の調査で基壇東辺南側では延石を使用しているのに対して、基壇東辺北側では延石を使用していない状況が確認されていることから、当初は基壇周囲全面に延石を敷いていたものが、後世に延石の一部が外され、代わりに花崗岩製栗石を据える工法に変更された可能性が考えられる。

最後に基壇北辺の再調査成果から、南大門の基壇の構造、および葛石上面までの高さを復原しておくる。地覆石の高さは約30cm（1尺）と判明している。この上に乗る羽目石・東石については高さのわかる完形品は確認されていない。しかし今回の調査中、現大安寺本堂北側軒下に羽目石と思われる凝灰岩切石が存在することを知った。高さ約102cm（3.4尺）、幅約70cm（2.3尺）、厚さ約18cm（6寸）で、下部には高さ約6cm（2寸）、幅約9cm（3寸）に欠き込んで面を施す。現住職に出所・由来を見ねたところ、全くわからないということであり、果して南大門基壇外装の使用石材かどうかは不明である。しかし幅の数値が今回再調査時に確認した羽目石と一致すること、下部の欠き込みが地覆石にある欠き込みの寸法と合致し、地覆石との相欠き仕口としたものと考えられることから南大門基壇外装の羽目石とみてよかろう。これを用いると地覆石底面から羽目石上面までの高さは126cmと算出できる。次に羽目石の上に乗る葛石であるが、これも過去の調査で確実にそれとみられるものは確認されていない。そこで石階の出を参考に葛石上面の高さを求めた上で、葛石の寸法を算出する。まず階段最下段の段石の法量については過去の調査で確認されており、高さ約30cm（1尺）、幅は約42cm（1.4尺）と判明している。葛石と地覆石が前面を揃えていたと仮定すると、葛石・地覆石前面から最下段段石までの長さは約1.5mとなる。



南大門基壇北面復元基壇断面図・現大安寺境内所在凝灰岩切石（1／20）

階段を葛石を含めず4段とし、各段石の重なりを4.5cm（1.5寸）とすると1.5m（5尺）となる。地覆石の高さおよび最下段の段石の高さは約30cmであることから段石全てを高さ30cmとすると、段石の踏面は約37.5cm（1.25尺）に復元できる。したがって地覆石底面から葛石上面までの高さは約1.5m（5尺）となる。ここから地覆石下面～羽目石上面までの高さをひくと葛石の高さは地覆石・段石と同じ約30cm（1尺）と復原できる。幅も前面が地覆石前面と同じであったとするならば、地覆石・段石と同じ幅約42cm（1.4尺）と復原できる。また葛石後面後角は高さ約6cm（2寸）、幅18cm（6寸）に欠き込まれ、羽目石との相欠き仕口を設けていたものとおもわれる。これで葛石の寸法、基壇化粧の構造、地覆石下面から葛石上面までの高さが約1.5m（5尺）と算出できた。これに今回の調査で判明した地覆石下面の標高61.4mを加えた高さ62.9mが葛石上面の標高となる。この上の水垂れ勾配を考えるとこの十数cm上が想定される基壇上面となる。さて第38次調査で確認された基壇築成土検出面は62.3mである。このことから南大門基壇上面は後世に最低60cm程度は削平をうけていると考えられる。

（原田憲二郎）

1) 大岡實ほか「大安寺南門・中門及び回廊の発掘」『建築学会論文集』50 日本建築学会1955

2) 「史跡大安寺旧境内の調査第57次」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 平成元年度』奈良市教育委員会 1990

3) 山木忠尚「大安寺の歴史」『大安寺』史料大安寺史編纂委員会 1984

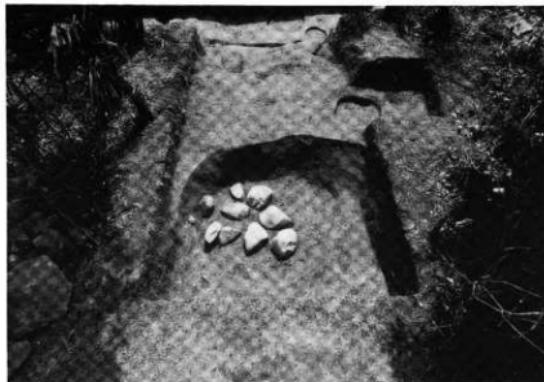
4) 「史跡大安寺旧境内の調査（4）食堂等大衆院指定地の調査第57次」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 平成5年度』奈良市教育委員会 1994



第77次発掘区東半部全景  
(東から)



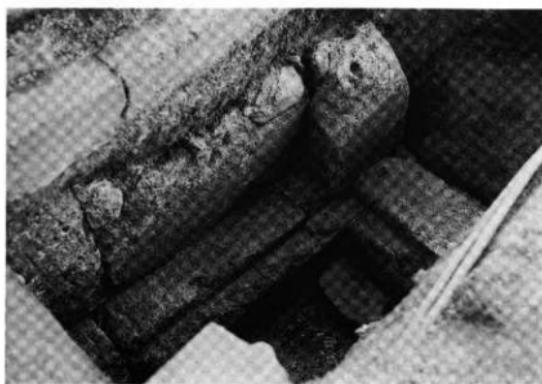
第77次発掘区西半部全景  
(北から)



第77次発掘区南大門南側柱列  
中央の礎石据付穴（北から）



第80次発掘区全景（東から）



第80次南大門基壇北辺  
中央石雕取付部（北東から）

## (2) 賤院推定地北方地区の調査 第78次

調査地は、史跡大安寺旧境内地区的北東隅の部分、大安寺の伽藍復原においては賤院推定地の北方部分に該当する。また、現存する杉山古墳墳丘の北北東方向約130m付近に位置している。

過去の近隣地区での調査例としては、平成5年度に調査地の東側約20mのところで、奈良市教育委員会により発掘調査が実施されており(市大安寺第59次)<sup>1)</sup>、奈良時代の遺構は確認できなかったものの、16~17世紀頃の溝などの遺構を検出している。

今回の調査においては、史跡大安寺旧境内地内でも比較的調査例の少ない北東部分における奈良時代遺構の残存状況の把握と、中近世の遺構の検出を目的とした。調査面積は約28m<sup>2</sup>である。

発掘区内の基本層序は、上から順に盛土、茶褐色土、淡茶灰色土と続いて、概ね現地面下約0.3mで黄灰色粘土層もしくは黄灰色砂礫層の地山に到達する。今回の調査で、遺構検出作業は地山上面で実施した。発掘区内で確認した地山上面の標高は約62.3mである。

調査の結果、発掘区の南半部分の大半は、近代以降の建築に伴う搅乱や、最近まで使用されていたと思われる井戸などによって、大きく削平を受けており、遺構を確認することはできなかった。しかし北半部分では、柱穴および溝、土坑をいくつか検出した。ただし、これらの遺構については、埋土から出土した遺物が極めて少ないので、その時期を特定するまでは到っていない。

また、市大安寺第59次調査において検出した、16~17世紀頃の東西方向の溝に関しては、今回の発掘区内では確認されなかった。こうした状況から、この溝は市大安寺第59次発掘区と当発掘区との間で屈曲しているか、あるいは途絶えている可能性が大きいと思われる。

なお出土した遺物は、遺物整理箱にして約8箱分ある。その多くを中近世期以降の瓦や土器・陶磁器類の破片が占めているが、一部には奈良時代の須恵器、土師器、瓦の破片も含まれている。

今回の調査では、発掘区の南半部分が大きく削平されていることもあって、奈良時代の遺構の存在を確認することはできなかった。しかしながら、奈良時代の土器・瓦片が若干ながらも出土したことからみて、かつては奈良時代の遺構が存在していた可能性が高いと考えられよう。

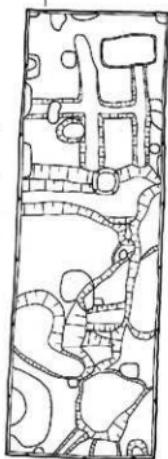
当調査地付近は、発掘調査の事例が少なく、地下遺構の様相を把握するには充分な成果を得ているとは言い難い。今後の調査の蓄積が期待される。

(武田和哉)

1) 奈良市教育委員会 「賤院地区的調査 第59次」 「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度」 1994



発掘区全景（北から）



遺構平面図（1/100）

### (3) 食堂并大衆院推定地の調査 第79次

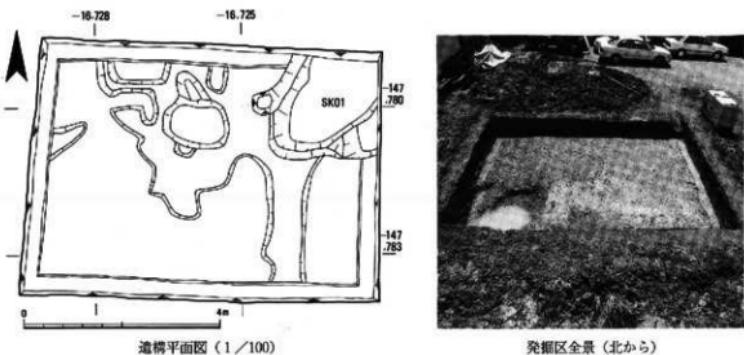
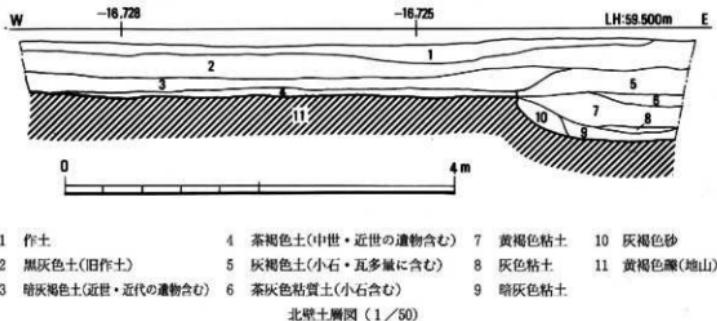
調査地は、史跡大安寺旧境内の食堂并大衆院推定地の北西部にあたり、西面築地推定地に隣接している。昭和55年度に、今回の調査地の北側に近接して、第1次調査を実施しており、中・近世の溝を検出している。今回の調査では、西面築地関連遺構の検出を目的とした。

調査地の層相は、作土、旧作土、近世と近代の遺物を含む暗灰褐色土と続き、その下には部分的に中世から近世にかけての時期の遺物を含む茶褐色土が堆積しており、続いて地表下約0.6mで黄褐色疊の地山に達する。地山の標高は59.8mである。調査地は近世以降に削平を受けているものと考えられ、今回の調査では、奈良時代の遺構は検出しなかった。

検出遺構には、土坑SK01がある。東西2.3m以上、南北2.1m以上、検出面からの深さ0.46mの掘形平面が不整円形の土坑で、埋土中からは江戸時代末の陶磁器、近世の瓦類、木製の箸1点が出土した。今回、遺物包含層とSK01から奈良時代の瓦類、中世の土器類が若干量、近世の瓦類が遺物整理箱3箱分、陶磁器1箱分、木製箸1点が出土した。

今回の調査では、北隣で行った第1次調査同様、大安寺の伽藍及び西面築地に関連する遺構は検出できなかった。  
(久保清子)

1)奈良市教育委員会「大安寺旧境内 発掘調査報告」「奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和55年度」



## (4) 経樓の調査 第81次

### I 調査の目的

調査地は大安寺の伽藍復原によると経樓の推定地にあたる。今回の調査では経樓及びそれにつながる軒廊の確認を目的とした。調査地の東西に隣接する市道では、平成8年度に下水道整備事業に伴い、発掘調査を行ったが、その際には経樓の遺構は検出していない。ただ、それに関わるものかと考えられる瓦片の多く入った焼土混じりの土坑を検出している。

### II 調査地の層相

基本的な層相は盛土以下、黒褐色中粒砂、茶褐色細粒砂質シルトと続き、地表下約1.0mで経樓及び、軒廊の基礎築成土となる。基礎築成土上面の標高は約61.7mである。西側では茶褐色細粒砂質シルト以下、暗茶褐色細～中粒砂、暗灰色細～中粒砂、茶灰色中～粗粒砂、黒灰色中粒砂と続き、黄灰色中粒砂、灰色粗粒砂の地山に至る。地山上面の標高は約61.5mである。

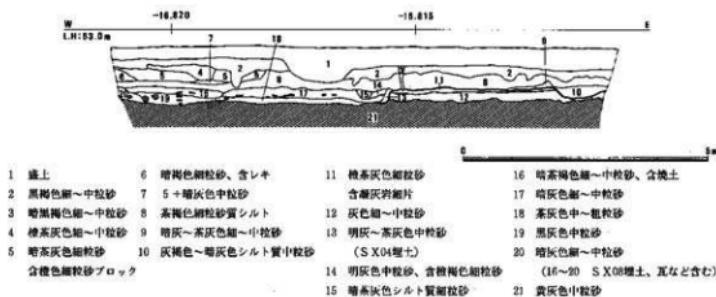
### III 検出遺構

経樓基壇、講堂東回廊と経樓をつなぐ南北方向の軒廊とその基壇、基礎外装抜き取り痕、土坑がある。

**経樓基壇** 東西7.0m分、南北14.5m分を検出した。基壇は後世の上坑や搅乱で大きく削平されて、高さ5～20cmほどしか残っていない。築成土は茶灰色細粒砂～中粒砂が積み上げられているが、版築の痕跡は認められない。基壇は発掘区外へと続き、その南北の規模は確認できなかった。

**S C01** 講堂東回廊と経樓をつなぐ南北方向の軒廊である。軒廊と経樓は基壇により直接つなげられている。基壇は東西4.4m分、南北3.7m分を検出した。築成土は灰色細粒砂～中粒砂が積み上げられているが、版築の痕跡は認められない。築成土の一部に凝灰岩の混じる橙茶灰色細粒砂が見られた。後世の削平により、高さ15cmほどしか残らない。軒廊は掘立柱建物で、基壇上で桁行1間(3.0m、10尺)以上、梁間1間(3.6m、12尺)を検出した。講堂東回廊と鐘楼をつなぐ軒廊と桁行は異なるが梁間は同じ規模である。柱掘形は1辺1.0mの平面方形である。経樓、軒廊とともに基礎外装は抜き取られていたが、後述するS X08から凝灰岩の切石が出土しているので、凝灰岩切石による壇上積み基壇であったと考えられる。

**S X04～07** 経樓、軒廊基壇の周囲に断続的に巡る幅15cm、深さ1～5cmほどの溝状の遺構である。基礎外装を抜き取った痕跡であると考える。



発掘区北壁土層図 (1/100)

**S K02** 経樓基壇の西側で検出した土坑である。S X08に重複する位置で検出した。発掘区外の西と北へ続くため、全体の形状は不明で、南北3.1m以上、東西0.4m以上である。発掘区西壁の土層の観察によるとS X08より新しい。検出した面からの深さは0.1~0.2mである。

**S K03** S K02の南側にある土坑である。S X08直下の地山上面で検出した。発掘区外西へ続くため全体の形状は不明で、南北約2.8m、東西0.4m以上、検出面からの深さ0.1~0.3mである。

**S X08** 経樓と軒廊基壇の周縁を、大量に瓦を含む土で整地している。整地土に焼土が混じることから、経樓、軒廊が焼失したときの瓦礫を外側へかきだしたものであろう。整地土から多くの瓦と共に10世紀中頃~11世紀初頭の土器も出土している。

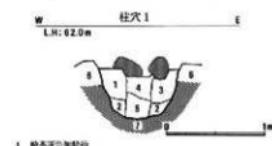
**S X09** 基壇築成土を補修した痕跡である。重複関係から基壇築成土よりも新しく、基壇外装抜き取りによる窪みよりも古いことが判る。埋土は暗茶灰色中粒砂+シルト質細粒砂で、土器の細片を含んでいるが、補修の時期を特定できるものはない。

なお、今回は経樓、軒廊の雨落溝は確認できなかったが、基壇外装抜き取り痕跡であるS X04~07の外側がさらに一段低くなっていることから、この位置に想定することも可能であろう。

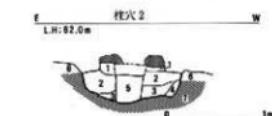
#### IV 出土物

土器類、須恵器、黒色土器、輸入磁器、国産陶磁器が遺物整理箱で1箱分、瓦塼類が遺物整理箱で105箱分出土した。以下、主なものについて述べる。

**瓦塼類** 瓦塼類の大半は丸瓦・平瓦である。ここでは新種の軒瓦と特筆すべきものを中心に述べる。1は6138Kである。瓦当面の完存する資料が初めて出土したため、珠紋数が

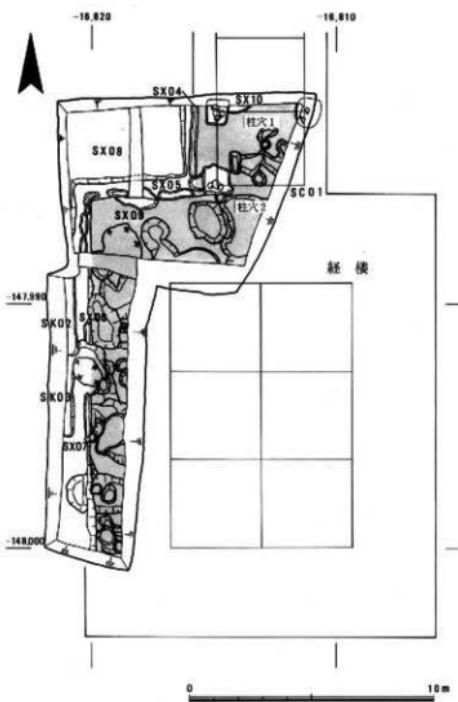


1 暗茶灰色加熱砂  
2 白色シルト質細粒砂  
3 暗茶灰色丸瓦  
4 反茶色シルト質細粒砂  
5 暗茶色切妻  
6 暗茶色シルト質細粒砂  
7 灰色砂



1 暗茶色切妻  
2 暗茶色圓瓦  
3 暗茶色シルト、白色細粒砂、土器片  
4 長葉シルト質細粒砂  
5 暗茶色丸瓦  
6 暗茶色小板瓦  
7 灰色砂

軒廊柱穴1・2断面図 (1/50)



遺構平面図 (1/200)

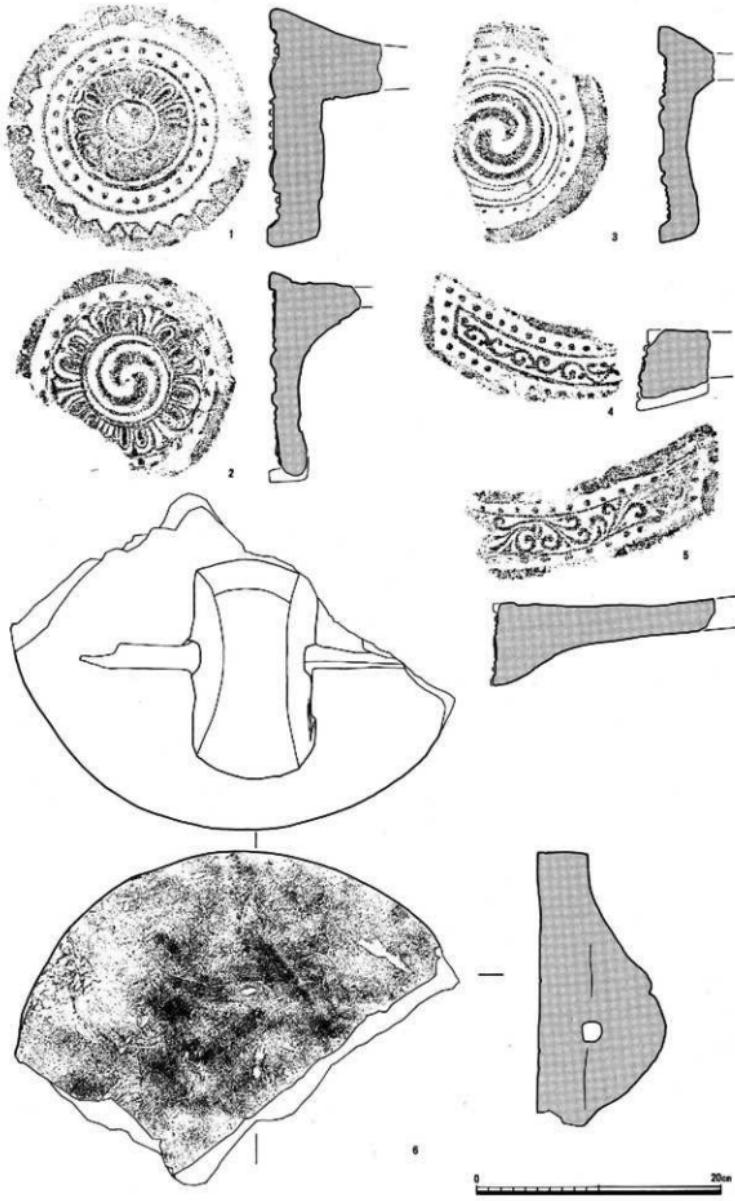
28であることが明らかになった。丸瓦接合線の形状は、内面接合部の側面寄りを縦方向にヘラケズリした蒲鉾形である。2は中房内に右巻きの二巴紋を配した複弁6弁連華紋軒丸瓦である。中房中央には珠点があり、紋様を描くコンパスのあたりと思われる。間弁の両側には子葉の一部を表現する。3は左巻きの一巴紋軒丸瓦である。巴の尾は長く、圓線状に巡る。2・3の製作技法は共通する。すなわち、瓦当部と丸瓦との接合には内面、外面ともに補足粘土を用い、のち内面接合部から瓦当裏面にかけて、縦方向に粗いナデツケを施す。外面も縦方向に粗いナデツケを施す。丸瓦接合線の形状は半円形である。2・3ともに焼土を多量に含むS X08上から出土した。文献から経櫓は、寛仁元年(1017)の火災で焼失し、永暦が別当在任中の1101年から1116年の間に再建されたことがわかる。後述するように、S X08出土土器の年代は11世紀におさまることから、S X08焼上層が寛仁元年の火災による焼土層とも考えられる。しかし、従来巴紋軒丸瓦の初現は12世紀前半ないしは11世紀第4四半期と考えられている。S X08焼土層が寛仁元年の焼土層であるならば、2・3の巴紋軒丸瓦は従来の見解を大きく巡る資料となる。4は中心飾り牛頭形の唐草紋軒平瓦である。同じく大安寺で出土する6712Bの内区紋様に酷似するが、唐草の紋様がやや小さく、珠紋径が大きい。5は下向きのC字形中心葉の中に、二葉形を配する唐草紋軒平瓦である。同じく大安寺で出土する6716型式に似るが、中心二葉である点、唐草紋が連続しない点、多数の支葉をともなう唐草である点が異なる。頸部は糸切りした粘土板に顎用粘土を接合し、のち瓦当側から平瓦部の方向に粗くナデツケを施して整形する。6は無紋の鬼瓦である。表面はナデ調整を行うが、部分的に布目痕が残る。表面左上端部には角棒状工具による圧痕がある。裏面には固定装置である締位の把手がある。固定装置の観察から、把手は棒状の粘土の両端を本体に取り付けたものではなく、本体に粘土塊を接合した後、棒状工具を用いて両側面から刺り込んで把手を作成したものとわかる。この固定装置の製作法は、同じく大安寺で出土する奈良時代の鬼瓦、南都七大寺IV式Bと共通する。

(原田憲二郎)

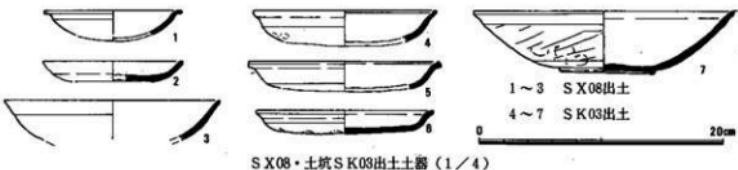
**土器類** 遺物の量は少なく時期の判るものも多くないが、S X08、SK03から経櫓が焼失した時期を考える手がかりとなる土器が出土しているので報告する。S X08からは土師器、須恵器、

型式種別	出土遺構	出土遺構			縦横基壇上 土塊	未掘り溝	遺物包含層	発見坑	合計
		SK02	SK03	S X08					
軒	6138Ca	1		1	1		1		4
	6138Cb		1	1					2
	6238E			1					1
	6138J			1					1
	6138K			3			3	1	7
丸	6304D		1	1					2
	7251A	1		1					2
	唐草紋						1		1
	中腹巴			2	3		1	2	8
	唐草紋								
瓦	巴紋			1			1	2	5
	型式不明	1	4	8			1		14
	軒丸合計	3	6	20	4	1	9	4	47
	6664A							1	1
	6690A				1				
平	6599A		1	3	1		1		6
	6712A		1	9			9		19
	6712B			1			3		4
	6712断縫			3			1		4
	6716系断縫				1			1	2
瓦	江戸期 磁紋							2	2
	型式不明	1		6			2		9
	軒平瓦合計	1	2	23	2	0	16	4	48

出土軒瓦一覧表



出土瓦類 (1/4)



S X08・土坑SK03出土土器 (1/4)

黒色土器が出土しているがそのうち図化できたのは土師器杯A(1)、皿(2)、黒色土器碗(3)のみである。1は口径11.2cm、高さ2.5cmに復原でき、かなり小型化が進んでいる。口縁部の外反は強い。器表面が剥離して調整の詳細は不明である。2の皿は1に比べて器壁が厚い。器表面の磨滅が著しく、内外面とも調整は不明であるが、体部外面には指頭圧痕のような凹凸が残る。3は黒色土器A類で高台の有無、外面の調整は不明である。1は南都Ⅲ期中段階(10世紀中頃～後半)、2は11世紀に入る可能性があり、3も10世紀中頃～11世紀初頭の範囲内に含まれるとと思われる。SK03からは土師器杯A(4・5)、杯B(7)、皿A(6)、須恵器甕、黒色土器が出土している。4～6はすべてe手法で調整し、中には体部外面に指頭圧痕が残るものもある。4の口縁端部は小さく巻き込むような形をしているが、5・6の口縁部は外反するだけで端部の巻き込みの形は不明瞭である。7の杯Bの高台は低く、高台径も小さい。口縁部上半を強くヨコナデした後、ヘラケズリを施すe-c手法で調整している。ケズリの下には指頭圧痕が見られる。底部外面もヘラケズリで調整する。4～7は南都Ⅱ期中段階(9世紀末～10世紀初頭)に相当する。

## Vまとめ

今回確認した経棲の軒廊の構造は断割調査の結果、掘立柱建物であった。しかし柱穴上面に残る石を根石と考えると、後に礎石建物に改築された可能性もある。鐘棲の軒廊は礎石建物と報告されており、桁行の規模も異なる。経棲と鐘棲及び軒廊は、講堂を挟んで対称的に配置されており、建物の規模は同じように復原されている。今回判明した建物構造の違いと、桁行の規模の違いについては2つの考え方ができる。1つは違う構造、規模で建てられたものであるという考え方、もう1つは、どちらの軒廊も当初は掘立柱建物で、後に礎石建物に改築され、その際に桁行の規模も変化したとする考え方である。ただし、鐘棲の軒廊は断割調査結果について報告されておらず、経棲の軒廊も桁行1間分を検出したのみであるので、いずれかについては今後の調査の課題である。基壇の周囲を整地するSX08には焼土や炭が混じるので、経棲と軒廊は火災によって焼失したと思われる。このSX08から10世紀中頃～11世紀初頭の土器が出土していることから、この焼土は寛仁元年(1017年)の火災で生じたものと考えられる。しかしSX08からは前述のように、他に巴紋軒丸瓦が出土している。巴紋軒丸瓦の初現を從来の見解通りとするならば、出土土器の年代とは大きく隔たりが生じる。よってこの焼土が寛仁元年の火災によるものかどうかは、今後の課題として残る。土坑SK03は基壇に近い場所に掘られており、9世紀末～10世紀初頭の遺物が出土している。寛仁元年の大火による焼失以前に、経棲周辺が既に荒廃しつつあった可能性を示している。

(細川富貴子)

1) 上野邦一「大安寺の発掘調査」『大安寺史・史料』大安寺史編集委員会 1984

2) 近藤義一「『くらら』の平安朝」教育社 1985

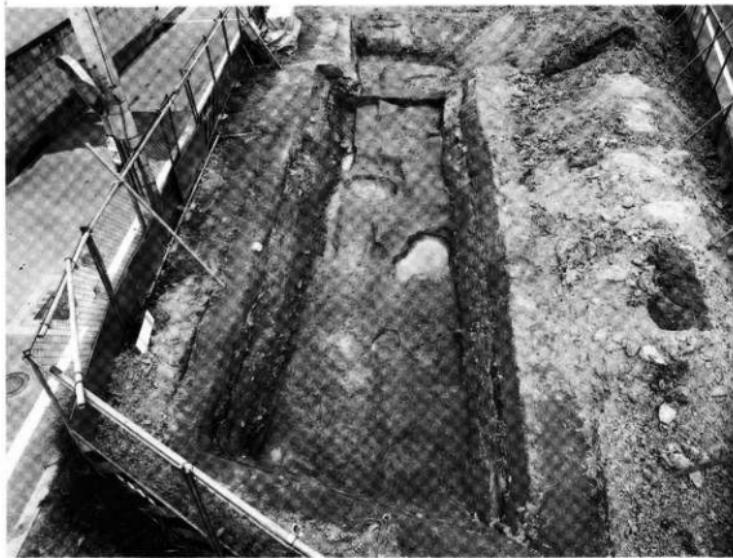
3) 津々池徹一「平安時代後期の瓦—巴紋瓦の種類について—」『研究紀要第3号』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996

4) 毛利光徳「日本古代の瓦面文鬼瓦」『研究論集IV』奈良國立文化財研究所 1980

5) 三好英輔「京都における平安時代前半期の土器様相—土器器の供給形態を中心とした編年試案—」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』奈良市教育委員会 1995



発掘区全景（北から）



拡張区全景（南から）

## (5) 西面中房の調査 第82次

### I 調査の目的

調査地は大安寺の伽藍復原では西面中房のほぼ中央付近に当たる。調査地周辺では過去に数回の調査事例があり、その成果から推定すると、当発掘区の位置は大安寺西面中房想定地の西隣部分に該当している。よって両建物の礎石据え付け穴列の検出は望めないものの、西面中房の基壇の西端部分および造構面の確認とその形成時期の特定を目的として調査を実施した。

### II 調査の概要

発掘区内(北東隅部分)の基本層序は、上から順に盛土、暗茶灰色土、暗緑灰色土(一部焼土を含む)、暗灰色土と続き、地表下0.4~0.6m(標高60.7~60.9m)で表面が淡茶灰色土の層に到達する。この層の上面には凝灰岩破碎片が堆積しており、また一部には鉄分の沈着のために赤褐色を帯びた箇所もある。土層の状態や層の標高等などを比較・検討した結果、この層が昭和1977年度調査で検出された西面中房の造構面や市大安寺第68次調査で検出した凝灰岩粉末の付着する層に対応する層と推定された。よって造構検出作業はこの十層上面において実施したが、西面中房の基壇に関連すると思われる造構は確認できなかった。以下、主要検出造構の概略を記す。

S X01 発掘区西側で検出した。造構検出面よりも上層の面から掘込まれており、埋土中には礫とともに奈良時代の上器・瓦片、さらに中世期の土器片、近世期の陶磁器片が含まれている。

S D02 発掘区中央やや南側で検出した東西方向の溝。造構検出面より上層の暗緑褐色土層上面から掘込まれている。幅約0.8m、深さ約0.5mを測る。造構の重複関係から前述のS X01よりも新しく、奈良時代の上器・瓦片に混って、近世以降の陶磁器の破片が出土した。

このほか発掘区中央で凝灰岩の破片が多く溜った箇所を検出したが、礎石や据え付け穴に関連する造構ではない。調査は造構面上で上記の造構を検出した後、発掘区北壁沿いにサブトレントを設定し、断ち割り調査を実施して土層観察を行った。その結果発掘区北東隅部分における造構面下の堆積状態は、茶灰色土、暗灰色土(黄灰色粘土小塊を含む)、暗灰色土と続いて、造構面下0.5~0.6m(標高60.2~60.3m付近)で黄灰色粘土の地山面に到ることを確認した。ただし版築作業の痕跡は認められなかった。さらに地山面上より掘込まれている上坑状の造構も確認した。造構面下の各層には、奈良時代の軒瓦や奈良時代後半の土器の破片が含まれていた。(武田和哉)

### III 出土遺物

遺物は全部で遺物整理箱31箱分が出土し、このうち28箱を瓦類が占める。瓦類の大半は丸・平瓦で、軒丸瓦14点、軒平瓦10点、熨斗瓦45点、埠3点である。軒丸瓦の内訳は、6138E 1点、6231種別不明1点、6284D 1点、6304D 6点、型式不明5点。軒平瓦の内訳は、6661B 3点、6663A 1点、6664A 1点、6712A 3点、6716C 1点、6717A 1点である。(山前智敬)

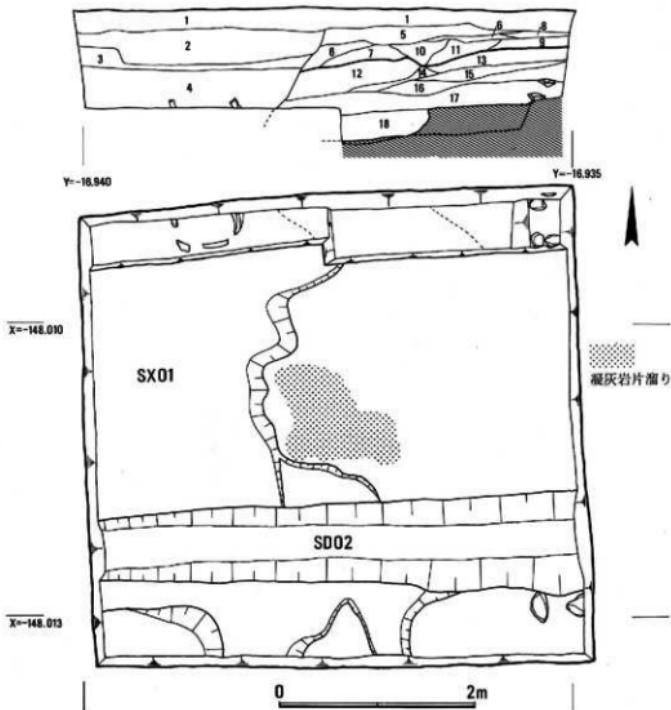
### IV まとめ

本調査で確認した造構面の下層で、奈良時代の軒瓦や奈良時代後半の土器が出土したことにより、この造構面の形成が大安寺の創建時期(710年)とは異なり、早くても奈良時代後半以降であった可能性が高くなつたが、詳細な時期を特定するまでには到つてない。本調査地の北隣で実施した市大安寺第68次調査では、造構面の下層より平安時代前半の土器が出土している。今後の西面僧房想定地での調査成果などにも留意しつつ、詳細に検討してゆく必要がある。(武田和哉)

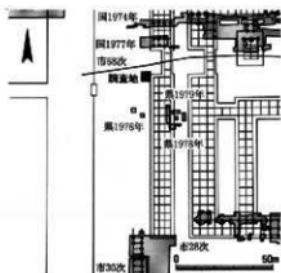
1) 泽田立文化財研究所『平城京左京六条三坊「西門発掘調査概要』奈良市教育委員会 1978、奈良市教育委員会『史跡大安寺旧境内(第28次)の調査』『奈良市埋蔵文化財調査報告書昭和61年度』1987、奈良市教育委員会『金堂・西面太廊・西面中廊の調査第68次』『奈良市埋蔵文化財調査報告書平成7年度』1995

- 1: 黄褐色土  
 2: 喷氣灰色土(一部候土混入)  
 3: 喷氣褐色土(遺物包含層)  
 4: 喷氣褐色土  
 5: 喷褐色土(包含層)  
 6: 喷灰色土(やや暗い)  
 7: 喷灰色土  
 8: 喷灰色砂礫土  
 9: 喷蒸褐色土(表面に凝灰岩破片地被)  
 10: 喷蒸灰色土(表面に凝灰岩破片堆積)  
 11: 茶褐色土  
 12: 喷蒸灰色土  
 13: 喷灰色土(黃褐色粘土小塊入)  
 14: 喷灰色土(奈良時代軒瓦出土)  
 15: 喷黃灰色質粘土(土坑状遺構組・奈良時代瓦片出土)  
 16: 黃褐色砂礫(擾乱)  
 17: 喷灰色粘質土(SX01埋土)  
 18: 喷灰色土+礫(S X01埋土・奈良時代瓦片出土)

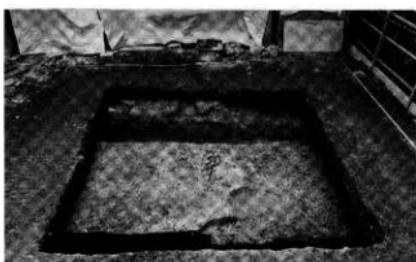
LH=81.50m



縦横平面図・北壁土層図 (1/50)



大安寺西面中房検出状況図 (1/2,500)



発掘区全景 (北から)

## (6) 北東太房の調査 第83次

### I 調査の目的

調査地は大安寺の御藍復原では北面僧房地区に該当し、北東太房の所在が想定される位置にある。調査地の周辺での過去の調査事例は数例あるが、北東太房に関する調査は昭和63年に奈良県が実施した調査(県75-1次)の1例のみで、しかも報文によれば北東太房に関する遺構は検出されていない。このほか近隣での主要な調査例としては、平成3年に調査地の北西約10mで実施された市大安寺第63次調査がある。<sup>1)</sup> この調査では、杉山古墳周濠を埋め立てて造成した北東中房の基壇と礎石据え付け穴を検出した。さらにこの南側部分を平成9年度に調査している(市大安寺第74次調査)。また平成5年に調査地の西約60mで実施した市大安寺46次調査では北西太房の北端と北東太房と北西中房を結ぶ軒廊を検出している。以上の過去の調査事例をふまえて、当調査では北東太房の基壇および礎石据え付け穴の検出と、杉山古墳周濠の南端部の確認を目的とした。

### II 調査地の層相と検出遺構

発掘区の基本層序は、南西部分では上から順に盛土、淡灰褐色土と統いて、地表下約0.4m(標高約62.1m)で明黄橙色砂礫上の地山層に至る。また同様に、北西部分においては、盛土、褐色土、淡灰褐色土、灰褐色粘土、暗灰色土と続き、地表下約0.7m(標高約61.8m)で地山層に到達する。一般的には発掘区の南半部の地山の標高が若干高い傾向にある。なお、当初に予想された太房の基壇築成などの層は確認できなかった。遺構検出作業は地山上面で実施した。

検出遺構には、近世の溝や上坑および時期不明の建物などがある。以下にその概略を述べる。また、事前に想定されていた杉山古墳周濠の南端部分は当発掘区内では検出されなかった。

S K01 発掘区の北東隅で検出した上坑。遺構の西半を検出し、一部は発掘区外へと延びる。長径約1.5m、深さ約0.2mで、埋土から奈良時代の瓦片と共に17~18世紀の陶磁器片が出土。

S K02 発掘区の北東部分で検出した土坑。発掘区内では遺構の西半部分を検出した。径約1.2m、深さ約0.2mで、埋土から奈良時代の瓦片と18~19世紀の陶磁器片が出土している。遺構の重複関係からみて、前述のS K01や後述のS D04よりも新しい。

S K03 発掘区の南東隅で検出した土坑。発掘区内では遺構の北半部分を検出した。長径約2.5m、深さ約0.3mで、埋土からは奈良時代の瓦片と17~19世紀の陶磁器片が出土した。

S D04 発掘区の中央ほぼ北寄りで検出した溝。東側は発掘区外へと延びる。発掘区内で検出した長さは約6.3m、幅約0.8m、深さ約0.5mで、埋土からは奈良時代の瓦片と共に18世紀前半の陶磁器片が出土した。なおこのS D04が存在する位置は、これまでの調査例などから、北東太房の北端部分が想定される位置である。調査の結果では、この溝内では凝灰岩等の基壇化粧の痕跡は確認できなかった。このほか、遺構の重複関係からみて後述のS D05より古い。

S D05 発掘区の中央から南辺ほぼ中央にかけて検出した溝。南側は発掘区外へと延びる。検出した長さは約3.8m、幅約0.7m、深さは約0.3mで、埋土から奈良時代の瓦片と共に18世紀前半の陶磁器片が出土した。遺構の重複関係から前述のS D04よりも新しい。

S B06 発掘区内では柱穴(あるいは礎石据え付け穴の抜き取り痕跡)を3箇所で検出した(P 1~3)。P 1~3の規模は径約1.0~1.2mで、形状は概ね平面隅丸方形を呈する。柱間は東西約3.9~4.1mで『大安寺伽藍縁起並記資財帳』の記述や、過去の北西太房での検出例と一致する。しかし南北は3.0m程度と短い。P 1~3の埋土の残存状況は良好でなく、断ち割りの結果では検出面からの深さはいずれも0.14~0.2m程度に留まる。埋土からは奈良時代の瓦の破片